福岡市埋蔵文化財調査報告書　第455集

那珂 16

－ 那珂遺跡群第48次、49次調査報告 －

1996
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第455集

那珂（なか）16

－ 那珂（なか）遺跡群第48次、49次調査報告 －

遺跡略号　NAK48、49
調査番号　9437、9438

1996
福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、大陸よりもたらされた豊かな文化財が眠る街として知られています。近代都市として今なお膨張を続ける福岡市のなかで、都市化と文化財の保護を両立させ、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりをめざし、これを子供たちに伝えていくことが、現代に生きる我々の務めであると言えます。

本書に収めた那珂遺跡群は、「奴国」の拠点集落や那珂郡衙の推定地と考えられており、市内でも最も重要な遺跡のひとつです。福岡市教育委員会では遺跡を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。その結果、これまでに50次を超える発掘調査が実施されていますが、本書はそのうち第48次、49次調査について報告するものです。

調査に際し、快くご理解とご協力を頂いた川辺俊範氏、日下部隆則氏をはじめ、調査に関係された方々に対し、深く感謝を申し上げるとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は1994年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した那珂遺跡群第48次、49次調査の報告書である。各調査担当者は第48次が吉武学、49次は加藤隆也である。
2．調査で検出した遺構の番号は各調査ごと別に付した。遺構の呼称は記号化し、竪穴住居をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑・土壙をＳＫ、溝・河川をＳＤ、柱穴を第48次はPit、第49次はＳＰ、用途不明遺構をＳＸとした。
3．本書に使用した遺構図、遺物実測図は吉武、加藤、久住猛雄、田中克子、正林真由美、西村晴香が作成し、製図は吉武、加藤、田中、西村、太田富美子、大神真理子が行った。また、菅波正人から図の提供をうけた。遺構写真、遺物写真は各担当者が撮影した。
4．本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
5．本書の執筆は第１、３章は加藤、第２章は吉武が行った。第４章の炭化材樹種同定は株式会社古環境研究所に分析報告を依頼した。
6．本書の編集は加藤が行った。
7．本報告書に係るすべての遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開される予定である。

第４８次調査

遺跡調査番号	９４３７		遺跡略号	ＮＡＫ４８	
調査地地籍	博多区那珂６丁目290他		分布地図番号	３８－Ａ－３	
開発面積	5,541.44㎡	調査対象面積	2,500㎡	調査面積	2,500㎡
調査期間	1994（平成６）年９月１日～10月15日				

第４９次調査

遺跡調査番号	９４３８		遺跡略号	ＮＡＫ４９	
調査地地籍	博多区東光寺町１丁目148,147の一部		分布地図番号	３７－Ａ－３	
開発面積	997㎡	調査対象面積	997㎡	調査面積	723㎡
調査期間	1994（平成６）年９月５日～11月２日				

本 文 目 次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境……（加藤隆也）　1
第２章　第４８次調査の記録……（吉武学）　5
１．調査に至る経過……5
２．調査の組織……5
３．調査の概要……5
４．遺構と遺物……8
（１）掘立柱建物……8
（２）溝状遺構……9
（３）井戸……17
（４）土坑……26
５．小結……26
第３章　第４９次調査の記録……（加藤隆也）　27
１．調査に至る経過……27
２．調査の組織……27
３．調査の概要……28
４．遺構と遺物……28
（１）竪穴住居（ＳＣ）……28
（２）掘立柱建物（ＳＢ）……38
（３）井戸（ＳＥ）……40
（４）土坑・土壙（ＳＫ）……40
（５）溝（ＳＤ）……44
５．小結……51
６．第４９次調査出土炭化材の樹種同定……（古環境研究所）　51

挿 図 目 次

Ｆｉｇ．１　福岡平野の主な遺跡（1/50,000）……2
Ｆｉｇ．２　那珂遺跡群調査地点位置図（1/8,000）……3
Ｆｉｇ．３　第４８次調査地点位置図（1/1,000）……6
Ｆｉｇ．４　第４８次調査検出遺構配置図（1/400）……7
Ｆｉｇ．５　ＳＢ－２０実測図（1/80）……8
Ｆｉｇ．６　溝状遺構配置図（1/200）……8
Ｆｉｇ．７　ＳＤ－０１、０２、０５土層断面図（1/40）……9
Ｆｉｇ．８　ＳＤ－０１出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……10
Ｆｉｇ．９　ＳＤ－０１出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……11
Ｆｉｇ．10　ＳＤ－０２出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……13

Fig.11　ＳＤ－０２出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……14
Fig.12　ＳＤ－０３出土遺物実測図（1/3）……14
Fig.13　ＳＤ－０４出土遺物実測図（1/3）……15
Fig.14　ＳＤ－０５出土遺物実測図（1/3）……16
Fig.15　ＳＤ－１２出土遺物実測図（1/3）……17
Fig.16　ＳＥ－０７実測図（1/40）……18
Fig.17　ＳＥ－０７出土遺物実測図（1/3）……18
Fig.18　ＳＥ－０８実測図（1/40）……19
Fig.19　ＳＥ－０８出土遺物実測図（1/3）……19
Fig.20　ＳＥ－１６実測図（1/40）……20
Fig.21　ＳＥ－１６出土遺物実測図（1/3）……20
Fig.22　ＳＥ－１７実測図（1/40）……21
Fig.23　ＳＥ－１７出土遺物実測図（1/3）……21
Fig.24　ＳＥ－３０実測図（1/40）……22
Fig.25　ＳＥ－３０出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……23
Fig.26　ＳＥ－３０出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……24
Fig.27　ＳＥ－３４実測図（1/40）……25
Fig.28　ＳＥ－３４出土遺物実測図（1/3）……25
Fig.29　ＳＫ－０６、１５、１８、２３実測図（1/40、1/80）……26
Fig.30　ＳＫ－１８出土遺物実測図（1/3）……26
Fig.31　第４９次調査地点位置図（1/1,250）……28
Fig.32　第４９次調査検出遺構配置図（1/160）……29
Fig.33　ＳＣ－０１、０２実測図（1/60）……30
Fig.34　ＳＣ－０３実測図（1/60）……31
Fig.35　ＳＣ－０４、０５実測図（1/60）……32
Fig.36　ＳＣ－０６、０７、０８実測図（1/60）……33
Fig.37　住居出土遺物Ⅰ（ＳＣ－０１、０２、０３、０７、０８）(1/3、1/4、1/6)……35
Fig.38　住居出土遺物Ⅱ（ＳＣ－０４)(1/3)……36
Fig.39　ＳＢ－０１、０２、０３実測図（1/60）……37
Fig.40　ＳＥ－０１実測図、出土遺物（1/40、1/3）……38
Fig.41　ＳＫ実測図、ＳＫ出土遺物Ⅰ（1/8、1/20、1/40）……39
Fig.42　ＳＫ出土遺物Ⅱ（1/3）……40
Fig.43　溝（ＳＤ）遺構配置図（1/300）……41
Fig.44　ＳＤ断面図Ⅰ（1/40）……41
Fig.45　ＳＤ断面図Ⅱ（1/40）……42
Fig.46　ＳＤ－１３出土遺物（1/3、1/4）……43
Fig.47　ＳＤ－０３遺物出土地点、断面図（1/100、1/40）……45
Fig.48　ＳＤ－０３上層遺物実測図（1/3、1/4）……47
Fig.49　ＳＤ－０３中層ａ遺物実測図Ⅰ（1/3、1/4）……47
Fig.50　ＳＤ－０３中層ａ遺物実測図Ⅱ（1/3、1/2）……48

Fig.51　ＳＤ－０３中層ｂ遺物実測図Ⅰ（1/3）……48
Fig.52　ＳＤ－０３中層ｂ、下層遺物実測図（1/3、1/4）……49

図　版　目　次

ＰＬ．１　１．第４８次調査地点調査区北半部（上空から）
　　２．第４８次調査地点調査区南半部（上空から）
ＰＬ．２　１．第４８次調査地点調査区南半部（北から）
　　２．ＳＢ－２０（上空から）
ＰＬ．３　１．ＳＤ－０１～０５（上空から）
　　２．ＳＤ－０１・０２・０５土層断面①（南から）
　　３．ＳＤ－０１・０２・０５土層断面②（南から）
　　４．ＳＤ－０１・０２・０５土層断面③（南から）
ＰＬ．４　１．ＳＥ－０７（北西から）　２．ＳＥ－０８（北から）
　　３．ＳＥ－１６（北東から）　４．ＳＥ－１７（東から）
　　５．ＳＥ－３０遺物出土状況（北東から）　６．ＳＥ－３０遺物出土状況近景（北東から）
　　７．ＳＥ－３０完掘状況（北東から）　８．ＳＥ－３４（東から）
ＰＬ．５　第４８次調査出土遺物・Ⅰ
ＰＬ．６　第４８次調査出土遺物・Ⅱ
ＰＬ．７　第４８次調査出土遺物・Ⅲ
ＰＬ．８　第４８次調査出土遺物・Ⅳ
ＰＬ．９　１．４９次北側調査区全景（南西から）　２．４９次南側調査区全景（北東から）
ＰＬ．１０　１．ＳＣ－０１（北西から）　２．ＳＣ－０２（北東から）
　　３．ＳＣ－０３（東から）　４．ＳＣ－０４・０５（南東から）
　　５．ＳＣ－０７（南から）　６．ＳＣ－０８（北西から）
ＰＬ．１１　１．ＳＫ－０１（北東から）　２．ＳＫ－０２（北から）
　　３．ＳＫ－０３（南から）　４．ＳＫ－０４（南東から）
　　５．ＳＤ－０３遺物出土状況（南東から）　６．ＳＤ－０３土層断面（北西から）
ＰＬ．１２　出土遺物
ＰＬ．１３　１．ＳＣ－０２出土炭化材顕微鏡写真　２．ＳＣ－０２炭化材出土状況（北東から）

表 目 次

Tab. 1　那珂遺跡群調査一覧 …… 4

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地

那珂遺跡群が立地する福岡平野は南北にのびる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面している。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に解析された丘陵や段丘が樹枝状に残されている。那珂遺跡群は御笠川、那珂川両河川に挟まれ、春日丘陵から次第に高さを減じながら北西にのびる洪積丘陵に立地する丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、鳥栖ローム層が最上部に形成される。この上には南から麦野、井相田、高畑、板付、諸岡、井尻、那珂、比恵遺跡が所在する。那珂遺跡群の範囲は南北約1.6㎞、東西約0.8㎞が予想され、台地上の標高は５～11ｍを測る。

２．周辺の遺跡

旧石器時代では、当遺跡群南側の諸岡丘陵の諸岡遺跡、南西側の五十川高木遺跡、東側の板付遺跡などがあり、ナイフ形石器などの遺物が発見されている。また、那珂遺跡群内においても該期の遺物が出土している。

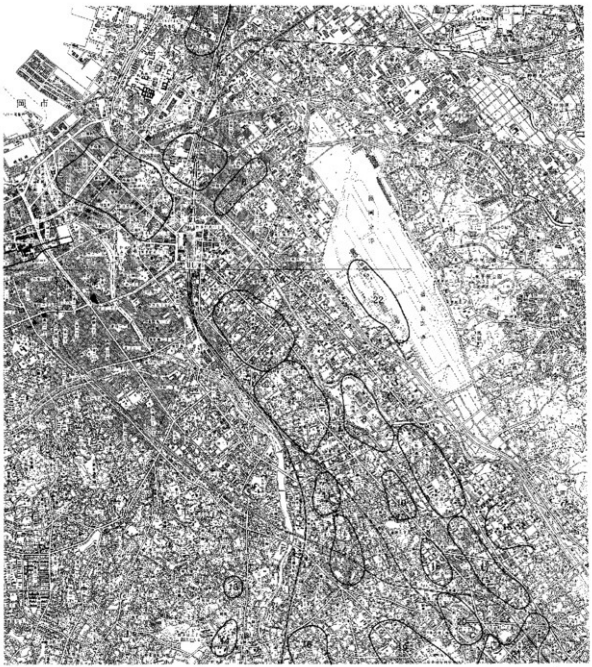
縄文時代の遺跡は、板付遺跡で早期から前期の遺物が、野多目遺跡では中期から後期の貯蔵穴群が発見され、当遺跡群第39次調査では二重の環濠が発見されている。

弥生時代では数多くの遺跡が知られているが、春日丘陵から北側では弥永原、井尻、五十川、比恵遺跡等の遺跡が間断なく続いていく。また、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、弥生時代後期の環濠、大型建物跡や多量の木製品が検出された雀居遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した甕棺墓が出土した諸岡遺跡等が存在する。当遺跡群、比恵遺跡群の調査において青銅器やその鋳型が出土しており、集落としての様相を異にする。

古墳時代においても、丘陵上の集落は継続していく。台地の東側低地部にあたる地点には那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡等で水田跡、大規模な井堰や水路が検出されている。また、古墳については三角縁神獣鏡が出土した最古式の那珂八幡古墳、後期の前方後円墳である剣塚古墳が同丘陵上に位置する。

６世紀後半においては、第10次、14次、18次、23次調査地点で、大規模な掘立柱建物が確認されており、北側に位置する比恵遺跡群第７次・第13次、第８次、第39次調査地点では、大型の倉庫群、建物、櫓が検出されている。これらは宣化元年（536）に、設置された「那津官家」に関連する遺構と考えられている。

福岡平野は那珂、御笠、席田の３郡に分割される。那珂郡衙の所在地はまだ限定し得ないが、那珂台地周辺に設けられた可能性がある。また、周辺では板付遺跡の南側の高畑遺跡では奈良時代の寺院址の存在が推定されている。



1 **那珂遺跡群**　2 福岡城跡　3 博多遺跡群　4 箱崎遺跡群　5 堅粕遺跡群
6 古塚遺跡群　7 比恵遺跡群　8 那珂君休遺跡　9 板付遺跡　10諸岡遺跡
11五十川高木遺跡　12井尻遺跡群　13三宅廃寺　14野多目遺跡　15日佐遺跡群
16.三筑遺跡　17麦野遺跡群　18井相田C遺跡　19須玖遺跡群　20南八幡遺跡群
21雑餉隈遺跡群

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡（1/50,000）

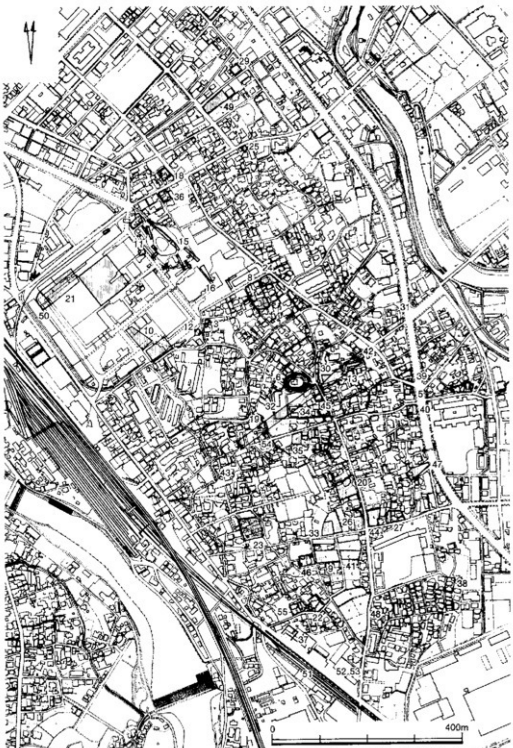


Fig. 2　那珂遺跡群調査地点位置図 (1/8,000)

Tab. 1　那珂遺跡群　調査一覧

次数	番号	所在地（博多地区）	面積（㎡）	調査年	調査原因	備　　考
1	7901	那珂１丿目44番	24	1971	学術調査	「九州考古学」53号
2	7414	那珂１丁目237－１外	231	1974	倉庫建設	「福岡市歴史資料館報告」第２集
3	7705	那珂１丁目680番	2	1977	住宅建設	
4	8036	那珂１丁目277番外	300	1980	道路建設	福岡市報告書第82集
5	8328	那珂１丁目377－2,3	100	1983	ビル建設	
6	8505	那珂１丿目44番	534	1985	重要確認	福岡市報告書第141集
7	8530	那珂３丁目８番	495	1985	公民館建設	福岡市報告書第162集
8	8609	那珂１丁目601番外	1350	1986	共同住宅建設	福岡市報告書第153集
9	8703	竹下５丿目463番	1030	1987	共同住宅建設	
10	8727	竹下３丁目１－１	862	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
11	8732	竹下３丁目１－１	5	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
12	8733	竹下３丁目１－１	20	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
13	8736	那珂２丁目地内	1536	1987	道路建設	福岡市報告書第222集
14	8832	竹下３丿目１－１	1200	1988	倉庫建設	福岡市報告書第291集
15	8802	竹下３丿目１－１	—	1988	重要確認	福岡市報告書第267集
16	8849	竹下３丁目１－１	240	1989	倉庫建設	福岡市報告書第291集
17	8850	竹下３丁目１－１	177	1989	変電所建設	福岡市報告書第291集
18	8855	東光寺１丁目23－５	463	1989	ビル建設	福岡市報告書第292集
19	8848	竹下５丁目地内	1600	1989	道路建設	福岡市報告書第323集
20	8906	那珂２丿目257番外	1406	1989	共同住宅建設	福岡市報告書第324集
21	8923	竹下３丁目１－１	1988	1989	工場建設	福岡市報告書第291集
22	8935	竹下５丁目420	776	1989	共同住宅建設	福岡市報告書第253集
23	8936	竹下５丁目270－１外	1428	1989	保育所建設	福岡市報告書第254、290集
24	8982	那珂１丁目35	325	1989	共同住宅建設	
25	8983	東光寺１丁目218番	100	1989	共同住宅建設	
26	9002	那珂２丁目249番	436	1990	共同住宅建設	福岡市報告書第407集
27	9003	那珂２丁目７－22	756	1990	共同住宅建設	
28	9008	東光寺１丁目312番外	150	1990	共同住宅建設	福岡市報告書第292集
29	9026	東光寺１丁目162番外	313	1990	倉庫建設	福岡市報告書第361集
30	9046	那珂１丁目462－１	80	1990	倉庫建設	福岡市報告書第292集
31	9053	那珂沼口802－15	123	1991	共同住宅建設	福岡市報告書第292集
32	9115	那珂１丁目地内	1300	1991	道路建設	福岡市報告書第365集
33	9122	那珂２丁目249－１	275	1991	共同住宅建設	福岡市報告書第364集
34	9144	那珂１丁目地内	1100	1992	道路建設	福岡市報告書第365集
35	9145	那珂２丁目213－１	20	1992	住宅建設	福岡市報告書第365集
36	9217	東光寺１丁目332番外	154	1992	共同住宅建設	
37	9224	那珂６丁目314番外	1215	1992	倉庫建設	福岡市報告書第366集
38	9225	那珂６丁目80－１	690	1992	共同住宅建設	福岡市報告書第399集
39	9228	那珂１丁目362	493	1992	共同住宅建設	
40	9256	那珂２丁目５番	460	1993	共同住宅建設	福岡市報告書第367集
41	9264	竹下５丿目509番	550	1993	共同住宅建設	福岡市報告書第399集
42	9308	那珂１丁目476番	63	1993	削平工事	福岡市報告書第399集
43	9315	竹下５丁目112－２	132	1993	倉庫建設	年報（1993年度）
44	9328	那珂２丁目122、123	821	1993	共同住宅建設	福岡市報告書第398集
45	9333	那珂１丁目829	200	1993	住宅建設	年報（1993年度）
46	9347	竹下５丁目432－２	250	1993	共同住宅建設	福岡市報告書第399集
47	9414	那珂２丁目100－１	450	1994	共同住宅建設	
48	**9437**	**那珂６丁目290他**	**2500**	**1994**	**共同住宅建設**	**福岡市報告書第455集（本報告書）**
49	**9438**	**東光寺１丁目148外**	**723**	**1994**	**共同住宅建設**	**福岡市報告書第455集（本報告書）**
50	9441	竹下３丁目１－１	6380	1994	工場建設	
51	9512	那珂６丁目20地内	38.4	1995	水道整備	
52	9513	那珂６丁目地内	384	1995	道路拡幅	
53	9528	那珂６丿目地内	—	1995	道路整備	
54	9530	竹下５丁目８－２	90	1995	店舗兼住宅	
55	9553	竹下５丁目379外	938	1995	共同住宅建設	

第２章　第４８次調査の記録

１．調査に至る経過

福岡市博多区那珂６丁目290番地７筆において、８階建てマンションの建設計画が起こり、平成５年10月12日に川辺俊範氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査願が提出された。同地区は那珂遺跡群に含まれており、遺構の存在が予想されたため、埋蔵文化財課では平成５年10月20日に試掘調査を実施した。5,541.44㎡の申請地内に８本の試掘トレンチを設定して調査した結果、６本のトレンチに於いて、現地表面から20～30㎝の深さで溝、竪穴住居跡、柱穴などを検出し、古墳時代を中心とする集落が存在することが明らかとなった。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考慮し、設計変更等を含めて協議を重ね、工事により破壊される部分についてのみ記録保存のための発掘調査を行うことで川辺氏との合意に至った。

調査に先立ち、川辺俊範氏と福岡市長との間に委託契約を締結し、発掘調査を平成６年９月１日から10月15日まで、整理・報告書作製を平成７年度に、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がそれぞれ行った。

２．調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、川辺俊範様には調査費用をはじめとして条件整備等で多大なるご協力を頂き、調査を円滑に進めることができた。ここに記して感謝を申し上げたい。

調査委託　川辺俊範

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛

調査総括　埋蔵文化財課長　折尾　学（前）、荒巻輝勝（現）
埋蔵文化財第２係長　山崎純男（前）、山口譲治（現）

調査庶務　埋蔵文化財第１係　吉田麻由美（前）、西田結香（現）

調査担当　埋蔵文化財第２係　山口譲治、菅波正人（試掘担当）
埋蔵文化財第２係　吉武　学（調査担当）

調査作業　石屋四一、金沢泰雄、金子國雄、熊本義徳、渋谷博之、高崎秀巳、高田勘四郎、高田勲、西田昭、二宮白人、萩尾行雄、藤田圭三、松原高博、森垣隆視、森本勇夫、米倉國弘、金子澄子、唐島栄子、酒井康恵、正林真山美、杉村百合子

整理調査員　田中克子

整理作業　安部国恵、有島美江、井澤早苗、人神真理子、太田富美子、冨田輝子、西村晴香、宮坂環

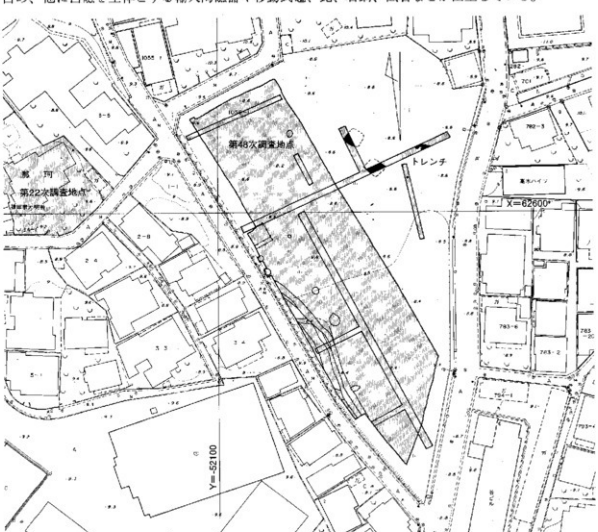
３．調査の概要

第48次調査地点は、那珂遺跡群の南西隅の一角に位置しており、1920年代の古い地形図によれば、３方を台地に囲まれた南に開く浅い谷の中にすっぽりと収まってしまう。また、調査区内においては、北端部と西沿いの部分で八女粘土層が露呈するが、南東隅では暗褐色を呈する鳥栖ロームの上位層が見られ、本来は東へ向かって下る谷状の傾斜地であったと見られる。試みに調査区の東端部を深く掘

り下げた結果、八女粘土層は地表下４ｍに存在していた。

発掘調査は、建物の建設によって破壊を受ける申請地の西沿いの部分を対象として行った。試掘調査では、同地の東半部に竪穴住居跡、溝、柱穴などの遺構を検出したが、この部分は駐車場となり、地下に**現状保存される**こととなった。

対象地の現況は休耕田で、標高は北端で8.6ｍ、南端で8.4ｍを測る。調査区は対象地の西端沿いに長く設定し、南北長は最大で107ｍ、東西幅は同じく27ｍを測る。地表下0.3ｍで遺構検出面となるが、遺構の密度は薄い。開田時に削平を受け、北端では隣地と約１ｍの段差があるものの、本来的に遺構の少ない地区にあたるものと考えられる。検出した遺構は、古代の井戸１基と中世前半期の掘立柱建物１棟、溝状遺構６条、井戸５基、土坑３基、および時期の定かでない溝６条、土坑１基などである。この他、近世以降に下ると思われる杭列を２条検出したが、これらは水田を区画する柵であると思われる。また、土取り、建造物に係る撹乱坑が多数見られた。溝状遺構は調査区の西に５条が切り合って検出された。溝は西に弧を描いており、この西側に集落が存在するものと考えられる。この溝状遺構のすぐ東側に、溝に沿って並ぶように井戸４基が配置されている。井戸は６基のうち２基で祭祀跡が確認された。出土した遺物はコンテナ約20箱分で、古墳時代後期～中世の土師器、須恵器が中心を占め、他に白磁を主体とする輸入陶磁器や移動式竈、瓦、石鍋、砥石などが出土している。



Ｆｉｇ．３　第４８次調査地点位置図（1/1,000）

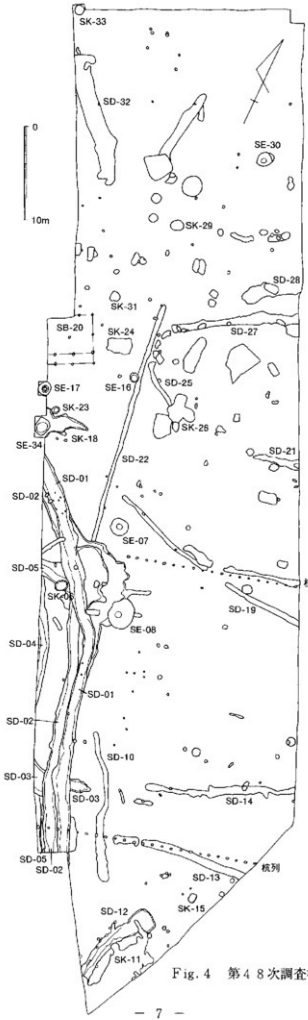


Fig. 4　第４８次調査検出遺構配置図（1/400）

4．遺構と遺物

（1）掘立柱建物

掘立柱建物は1棟検出したのみである。他に掘立柱建物にまとまる柱穴はなく、また柱穴自体の数が極めて少ない。

SB－20 Fig. 5　PL. 2

調査区の北西寄りに検出した掘立柱建物で、東西に長く、西側は調査区外におよぶ。現況で梁行2間、桁行3間以上で、南側に廂が取りつく。桁行方位をN－64°－Eにとる。梁行全長は4.31mで、柱間は北から2.13m、2.0mを測り、廂の出は1.1mである。桁行の柱間は東から2.0m、1.94mである。柱穴の掘り方は円ないし楕円形プランで、身舎の柱穴の径は25～31cm、深さは14～26cmを測り、妻柱が浅い。廂の柱穴の径は15～33cm、深さは7～30cmである。いずれの柱穴にも柱痕跡は認められなかった。

柱穴掘り方からは古墳時代の須恵器などが少数出土した。しかし、覆土は他の中世の遺構に近似しており、中世の遺構であると思われる。

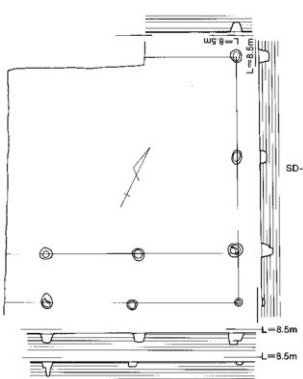


Fig. 5　ＳＢ－２０実測図（1/80）

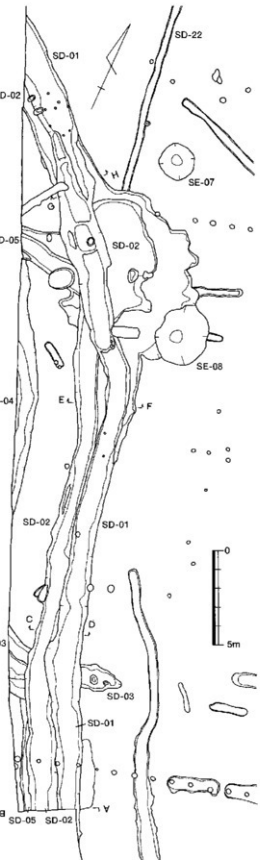


Fig. 6　溝状遺構配置図（1/200）

（2）溝状遺構

溝状遺構は13条を検出した。このうち時期が特定できるものは、SD－01、02、03、04、05で、11世紀後半～12世紀前半である。他にSD－22も古い時代の遺構と思われるが、時期を特定できる遺物が出土していない。その他の溝には杭列と平走するものなどもあり、近世以降に下るものが含まれよう。

溝状遺構のうちSD－01～05の５条は調査区の南西に集中している。SD－01はSD－02を掘り直したもので、さらにSD－02の下層にSD－05がある。SD－03はこれらの溝に交わる溝で、SD－04はSD－01の西側をこれと平走する溝である。Fig. 7に示した溝状遺構の土層は、①現耕作土、②床土、③暗褐色土（黄褐色粘土粒を含む）、③′（黄味が強い）、④暗褐色土、⑤砂・シルト、⑥③に近似する、⑦黄褐色粘質土（地山土に暗褐色土を含む）、⑧明黄褐色粘質土（地山土）、⑨黄褐色粘質土＋暗褐色土ブロック、⑩粗砂である。

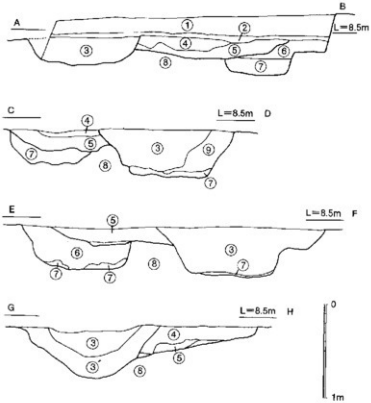


Fig. 7　SD－01、02、05土層断面図（1/40）

SD－01 Fig. 6、7　PL. 3

調査区の南西に検出したSD－01～05のうち最も新しい溝である。SD－02にほぼ重なっており、SD－03、05を切っている。調査区内で19.6mの長さを検出し、ゆるやかに蛇行して掘られている。南端で幅1.2m、深さ0.3m、北端で幅1.5m、深さ0.55mを測り、溝の基底面は僅かながら北に傾斜している。溝の横断面形は南側で逆台形を、北側でU字形を呈し、覆土は暗褐色土に地山土が混入したもので、砂の堆積は認められない。

出土遺物はコンテナ４箱分である。中世初期の遺物のほか、古墳時代後期から古代にかけての遺物が多量に含まれている。11世紀後半～12世紀前半の遺構であろう。

SD－01出土遺物 Fig. 8、9　PL. 5

１～11、13は土師器である。１は小皿で、完在するが器面が剝落して調整は不明である。胎土に砂粒を多く含む。口径9.0cm、器高1.2cmを測る。２は丸底坏で、調整は不明。胎土は精良。破片から復元した口径は14cm。３は坏で、底部はヘラ切りで板圧痕が残る。胎土に雲母粒を僅かに含む。口縁端部を欠くが、口径は16.5cm前後か。４も坏で、器面が剝落しているが、底部には回転糸切りの痕跡が認められる。胎土には雲母粒を僅かに含む。復元口径は15cm、器高は3.0cm。５は高台の付く椀の底部片である。調整は不明。６～８は器面が剝落して明瞭でないが、内面に炭素を吸着させる黒色土器Ａ類と思われる。いずれも低い高台の付く椀で、ヘラ磨きの痕は明瞭でない。７は底部付近に指頭痕が認められる。９～11は内外面に炭素を吸着させた黒色土器Ｂ類の椀である。10のみ高台をやや高めにつくる。いずれも器面の残りが悪いが、９の内面には雑なヘラ磨きが残る。13は甑の把手部分である。

ヘラ成形し、胎土には砂粒を多量に含む。

12は瓦器椀の口縁部片である。内外面にヘラ磨きを施し、内面は銀色の光沢を持つ。外面の磨きは単位が明瞭でなく、ヘラナデに近い。

14～18は須恵器である。14は高坏ないしは壺の脚と思われる。裾端部は内へ屈曲する。緩に長い透孔があるが、小片の為透孔の配置は不明である。15、16は坏である。底部の外縁寄りに輪高台を貼り付けている。17は甕の口縁部片である。口縁端部に断面三角形の突帯を貼付する。18は壺の底部であろうか。やや上げ底気味の平底になる器形と思われる。ロクロ目がよく残る。

19、20は越州窯系青磁の椀である。底部は輪高台である。19は見込みに圏線を描き、内に毛彫りで花文を配する。高台内僅には目跡が5ヵ所ある。淡灰青色の胎土に濃いオリーブ色の釉を全体に施す。20は緑味のある淡灰色の胎土に深みのある緑色の釉を全体にかけ、畳付のみ釉を掻き取る。見込みと畳付に目跡が残る。9～10世紀後半の製品と見られる。

21は青白磁の小壺の蓋で、上面には菊花文を型押しする。白色の胎土に淡い緑味のある透明釉をかける。

22～34は白磁の椀である。22は内面に片切り彫りと櫛描きで施文する。胎土は密で淡灰白色を呈し、淡いオリーブ色の釉には光沢がある。23は白色の密な胎土にガラス質の透明釉をかけ、貫入が密に入

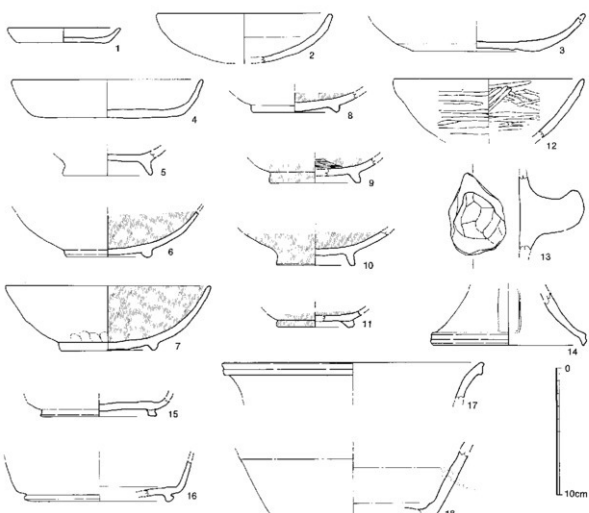


Fig. 8　ＳＤ－０１出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

り、光沢がある。24～28の白磁は淡灰白色の密な胎土に、緑味の強い白色釉をかけ、貫入はない。28は釉に不純物が混じっており、内面には櫛描き文を施す。29は胎土がやや粗く白色を呈し、白色の釉には極く淡い緑味がかかり、貫入がある。30は胎土が粗く淡い灰白色を呈し、釉は淡緑色で貫入がある。31～34は粗い淡乳白色の胎土に、黄味のある白色釉をかけ、貫入が密に入る。

35～38は中国産の陶器である。37以外には釉を施す。35、36は壺の口縁部か。緑茶色の釉が全体にかかるが、35は二次加熱のためほとんど剝げ落ちている。37は捏ね鉢の口縁部片である。胎土に多量

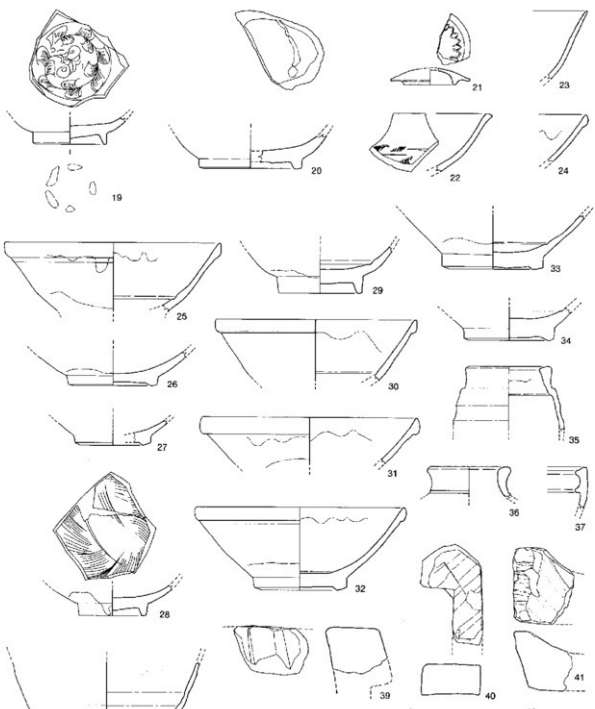


Fig. 9　SD－01出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

の砂粒を含む。38は褐釉陶器の壺か。胴部外面に黒緑色の釉を施している。

39は滑石製石鍋の口縁部片である。縦長の把手を付ける。40は滑石製石鍋の再利用品である。下端を欠く。41は砥石の小片である。2面に使用痕がある。砂岩系の石材を用いている。

SD－02 Fig. 6、7 PL. 3

SD－01にほぼ重なって検出した溝状遺構である。SD－03、05より新しく、SD－01、SE－07よりも古い。SD－05を掘り直し、北側をより直線的に延長したような印象を受ける。また、この溝が埋没した後にSD－01を掘り直しており、南側ではSD－01の北へ、北側では東へ、少しずれて位置する。SD－01に切られるため規模を数値で表現できないが、SD－01に比べて幅がやや広く、浅い。調査区内で21mの長さを検出し、中央よりやや北に寄った位置で西に緩くカーブをきり、この部分では東側に氾濫したように流路が広がっている。SD－01同様、溝底面はほんの少し北へ下っている。溝の横断面形は浅皿状を呈し、覆土は砂もしくはシルトで、底面に粗砂が堆積している部分もある。

遺物はコンテナ2箱分が出土した。中世の遺物のほか、古墳時代後期、古代の遺物を含む。

SD－02出土遺物 Fig. 10、11 PL. 6

42～51、54～56は土師器である。42、43は小皿である。42は口縁端部を内側に少し折り返す。底部には板圧痕があり、強い圧をうけて器形が波打っている。かすかに糸切りらしき痕跡があるが、器面が剥落しており明確でない。復元口径10.1cm、器高0.8cm。43は底部に回転糸切り跡と板圧痕が残る。胎土には雲母粒を含む。復元口径10.4cm、器高1.5cm。44～47は坏である。44は丸底坏で外面に刷毛目調整した後、これをナデ消す。復元口径は15.2cm、器高3.6cm。45も丸底坏で、復元口径15.0cm。46は坏で調整不明。復元口径15.6cm。47も坏で、器面が剥落しているが底面に回転糸切り痕が認められる。ほぼ完在しており、口径14.6cm、器高3.1cmを測り、焼き歪みがある。48、49は椀の底部片である。輪高台を貼り付けるが、器面が剥落しており、ともに調整は不明である。50は内面を燻す黒色土器A類である。輪高台を貼り付けるが、調整は不明である。51は内外面に炭素を吸着させる黒色土器B類である。内外面にヘラ磨き調整を施し、内面は光沢を持つが、外面のそれはヘラナデに近い。54は器台等の脚部片である。上面にはロクロ目が残り、脚部はヨコナデ調整である。55、56は甕の把手である。ヘラ成形しており、胎土には砂粒を多量に含む。

52、53は瓦器椀である。52は著しく器面が剥落しており、内外面にわずかにヘラ磨きの痕跡を認める。53は器形が著しく歪んでいる。内底面には指頭痕があり、内面はヘラ磨きを施すが残りが悪い。外面はヘラで横ナデしている。外底部には板圧痕が残る。

57～64は須恵器である。57～59は坏である。57は外底面にヘラ記号を施す。59は高台が底部の中心よりに貼付されている。60は壺の底部か。外面に沈線1条を巡らす。61、62は高坏の脚部である。61は縦長の透孔を入れるが、小片のため透孔の配置は不明である。62は61に比べて厚手のつくりである。63は鉢か。底部は丸く安定の悪い平底である。胴部外面には上半にカキ目が、下半に回転ヘラ削りが施され、外底にはヘラ記号がある。64は甕の口縁部片である。口縁端部は断面三角形に肥厚させ、外面には櫛描き波状文と2条の沈線文を施す。

65は越州窯系青磁の椀である。見込みに浅い段が巡る。胎土は淡灰色を呈し、釉は緑色で光沢があり、細かい貫入がはいる。全体に施釉し、畳付のみ掻き取る。見込みの段の内側に目痕が残る。外底に一筆で「 」と墨書している。

66、67は白磁である。66は椀で、胎土は白色、釉は淡く緑味のあるガラス質の透明釉で、貫入がはいる。67は壺で、底部に近い部位の破片である。内面にはロクロ目が見られる。胎土は灰白色で、緑

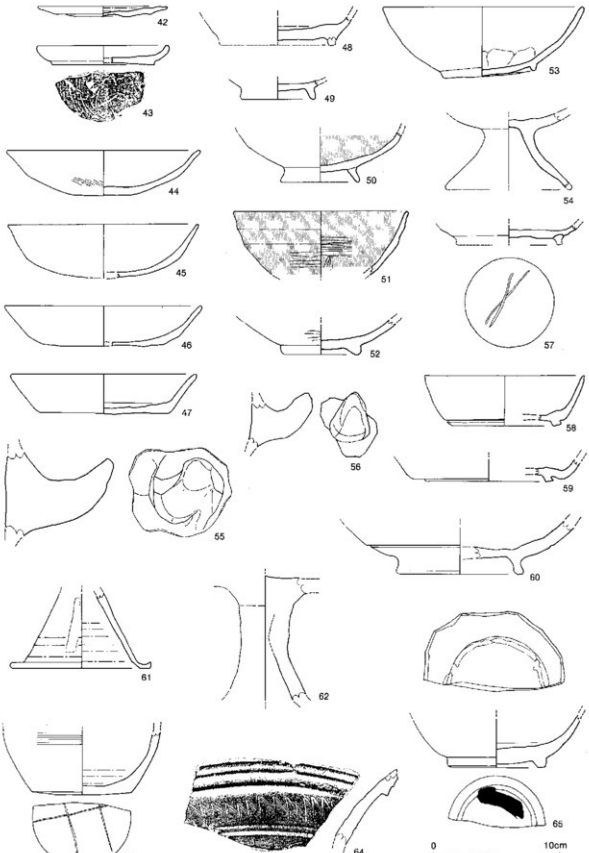


Fig.10　ＳＤ－０２出土遺物実測図Ⅰ (1/3)

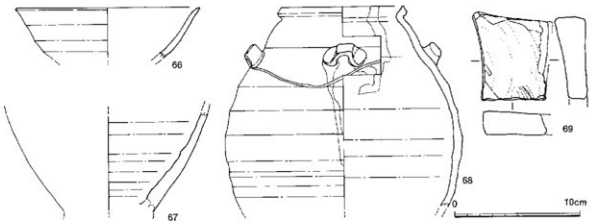


Fig.11　SD－02出土遺物実測図Ⅱ（1/3）

味の強い透明釉を全体に施す。

68は褐釉陶器の四耳壺である。胴部外面下半はヘラ削りし、肩部外耳の直下に波状沈線を巡らす。胎土は淡灰青色を呈し、濃い緑色の釉を全体にかけるが、内面は薄くほとんど剥げ落ちている。

69は砥石である。下半と右側面の一部を欠く。全ての平坦面を砥石として用いているが、特に正面の使用頻度が高い。砂岩製である。

SD－03　Fig.6　PL.3

調査区南西よりにその一部を検出した溝状遺構である。SD－01、02より古く、SD－05よりも新しい時期の遺構である。西側は調査区外へ延びるが、東側はSD－01を渡った所で途切れており、削平されたものか。調査区内で3.1mの長さを確認した。最大幅1.1m、深さは0.4mを測る。

コンテナ半箱分の遺物が出土した。量的には古墳時代後期、古代の遺物がほとんどを占めるが、遺構の切り合いから見て、中世初期の遺構と思われる。

SD－03出土遺物　Fig.12　PL.6

70は須恵器坏である。小片のため法量は不明である。高台が付く。71は土師器甕の把手である。ヘラ成形する。72は須恵器の甕である。口縁端部は断面台形に肥厚し、胎土には径3mmの砂粒を含む。73は砥石である。下半部を欠損するが、よく使いこまれている。頭頂面以外の4側面を砥石として用いている。砂岩製。

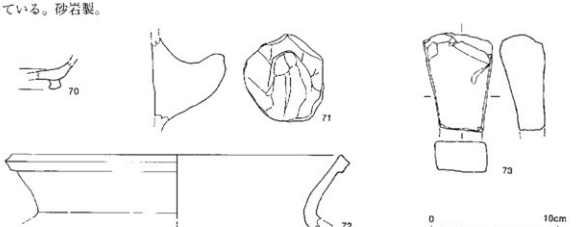


Fig.12　SD－03出土遺物実測図（1/3）

SD－04 Fig. 6　PL. 3

調査区の西壁際で検出した溝状遺構である。北端でSD－05と切り合うが、先後関係は明らかにし得ない。調査区内における限り、SD－01の西側に平行して掘られた形状を呈しており、７ｍの長さを確認した。溝の西側の立ち上がりは調査区外にあるが、幅は１ｍ以内に収まる。深さは0.2ｍである。覆土は粘質土であった。

遺物は弥生土器、古代の土師器、中世の白磁片などがコンテナ半箱分出土したが、細片が多く、図化できた遺物は２点である。中世初期の遺構と考えられる。

SD－04出土遺物　Fig.13

74は須恵器の壺である。口縁部の小片で、ローリングを受けている。端部は面取りし、口唇部直下に突線を巡らす。胎土は精良である。復元口径は20.5㎝を測る。75は白磁碗の口縁部小片である。胎土は白色を呈し、釉は白色を呈し半透明で貫入がある。Fig. 9－29の白磁に胎土・釉調とも近似する。

Fig.13　ＳＤ－０４出土遺物実測図（1/3）

SD－05　Fig. 6、7　PL. 3

調査区南西に検出した溝状遺構である。一帯に集中して検出した溝状遺構SD－01、02、03のいずれにも切られており、最も古い遺構である。調査区内で15.6ｍの長さを確認した。SD－02にほぼ重なって検出され、北端部で西に弧を描き、SD－02から離れて調査区の西壁に入っていく。SD－02に切られるため規模を数値で表現できないが、SD－02に比べ幅が狭く、深い。SD－02同様、溝底面はほんの少し北へ下っている。溝の横断面形は逆台形状を呈し、覆土は粘質土である。SD－02を掘り直した溝SD－01に、その断面形や覆土が近似している。

遺物はコンテナ１箱分が出土した。大半が古墳時代後期、および古代の遺物であるが、これに中世初期の遺物が少量含まれている。SD－05はSD－01、02とほとんどの部分で重なっており、調査時にこれらの遺構から遺物が混在してしまった可能性がある。よって、SD－05は時期的には古代に遡る可能性もある。

SD－05出土遺物　Fig.14　PL. 6

76～86は土師器である。76は小皿である。1/4程の破片で、器面は剝落しており調整は不明である。復元口径は8.6㎝、器高は1.1㎝である。77、78は丸底の坏である。器面があれて調整は不明である。復元口径は77が14.4㎝、78が16.4㎝である。79は坏で、小片のため法量は不正確である。やはり器面が剝落しており、調整は不明。胎土に細かい雲母粒を含む。80は平底の坏であろう。器面は剝落しており、胎土に細かい雲母粒を含む。復元口径は16.6㎝である。81は高台の付く椀である。高台は低く開く。器面は剝落しており、胎土には雲母粒を含む。82は内外面に炭素を吸着させた黒色土器Ｂ類で、ローリングを受けている。低い輪高台を貼り付ける。内面は細かいヘラ磨きが施され、光沢がある。83～85は甕もしくは甑の口縁部片で、３点とも別個体である。ともに胴部は外面に刷毛目調整、内面にはヘラ削り調整を施し、口縁部を横ナデ調整する。胎土には多量の砂粒と雲母粒を含む。復元口径はそれぞれ、83が29.6㎝、84が23.0㎝、85が28.2㎝である。86は甑の把手で、ヘラ成形し、胎土には多量の砂粒と雲母粒を含む。

87～92は須恵器である。87は坏もしくは壺の底部であろう。低く外へ踏ん張る高台を貼り付ける。

88、89は坏で、いずれも低い高台を底部の外縁近くに貼り付ける。高台は下面全体が接地する。90は甕の頸部付近の破片である。外面は平行叩きを縦位のカキ目でナデ消している。内面は同心円文のアテ具痕が残る。口縁部はロクロ仕上げ。91、92は高坏の脚である。いずれもロクロで整形した脚筒部の頸を切って、坏部に接着させる。92は脚の中位に沈線2条をまわして装飾する。

93は白磁碗である。胎土は灰白色を呈し密で、緑味がかった透明釉を施す。外面は釉にムラがあり、高台以下は露胎で、全体に貫入がある。

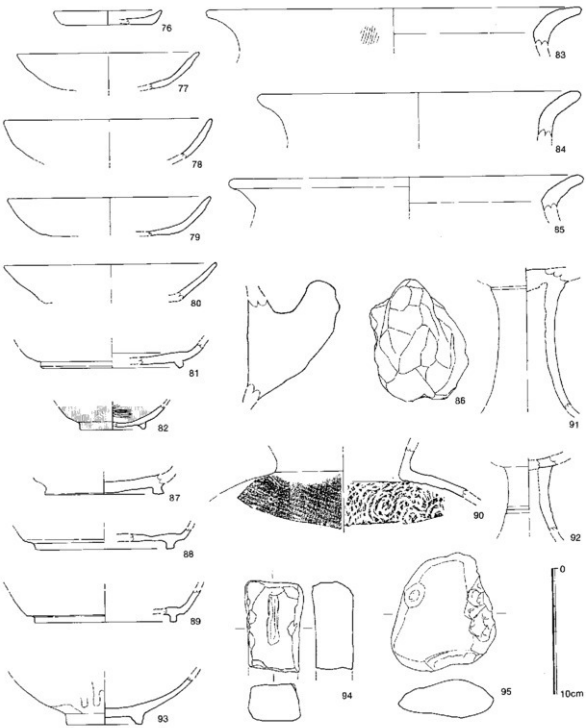


Fig.14　SD－05出土遺物実測図（1/3）

94、95は石製品である。94は砥石で、下半部を欠く。正面は使用により中央が溝状に少し窪む。正面と両側面の3面を砥石に用いている。95は浮子で、軽石に若干の手を加えたものである。右側面と下面を軽く打ち欠いている。

以上の遺物以外にも、移動式竈、瓦の小片などが出土している。

SD－12 Fig. 4

調査区の南端部に検出した溝状遺構である。南に接する攪乱溝SK－11に一部を破壊されている。北東にカーブする溝で、幅1.2m、深さ0.3mを測り、調査区内で9.6mの長さを確認した。南側は調査区の外へ伸びて行き、北側は浅くなって消えている。

出土遺物は少なく、いずれも著しくローリングを受けている。土師器、須恵器等、古代の遺物を中心に出土しているが、中世の遺構であろう。

SD－12出土遺物 Fig.15

96は須恵器の坏である。口縁部片で、内湾して開く。97も須恵器の坏で、底部の中心よりの位置に輪高台を貼り付ける。

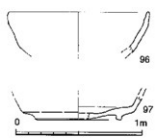


Fig.15　SD－12
出土遺物実測図（1/3）

（3）井戸

井戸跡は6基を検出した。全て素掘りの井戸で、井戸側は全く検出できなかった。井戸の配置は、溝状遺構SD－01の東側に、溝に沿って南からSE－08、07、34、17が並び、SE－17の東に9m離れてSE－16が位置する。SE－30のみは、これらの一群からやや離れた調査区北東隅に位置している。祭祀が行われている井戸は、離れて位置するSE－16とSE－30で、溝に沿って位置する井戸には祭祀が行われていない。井戸の内、規模が最も大きいものはSE－08で径3.3m、最も深いものはSE－17で深さ2.8m、逆に最も径が小さく浅いものはSE－16で、径0.95m、深さ1.6mをそれぞれ測る。井戸は6基とも白色粘質土（八女粘土）を少しえぐったところで止めており、八女粘土層の上面に湧水点があったものと見られる。地下水位の変動があったものと見え、現在は水は湧かない。また、調査区東端では八女粘土層が地表下4mに存在することを確認しており、井戸が調査区の西に偏って位置することと関係があろう。井戸の時期は、SE－30のみが古代に属し、他は溝状遺構と同じ12世紀代を中心とする時期に属するものと考えられる。

SE－07 Fig.16　PL. 4

調査区中央のやや西に寄った位置に検出した井戸である。掘り方の平面形は正円に近く、径は1.9mである。基底面も円形プランで、径は0.55mを測り、上に向かって直線的に開く断面形を呈し、検出面付近でラッパ状に開く。検出面から基底までの深さは2.2mである。覆土には暗褐色粘質土が詰まっていた。井戸壁面の土層は、①黄褐色粘土、②淡灰白色粘土、③暗褐色粘土、④白色粘土（八女粘土層）である。湧水は見られない。

出土遺物は量的に少ない。出土土器から、12世紀前半～中頃に位置付けられる。

SE－07出土遺物 Fig.17　PL. 6

98は土師器小皿である。底部は回転糸切りで、切りかたは荒い。板圧痕が付く。胎土には雲母粒を含んでいる。完在しており、口径9.3cm、器高1.6cmを測る。

99は白磁椀である。外面は回転ヘラ削りする。胎土は灰色がかった白色を呈し、密である。釉は緑

味のある透明釉で、体部下端から高台にかけては露胎である。

100は褐釉陶器の双耳壺もしくは四耳壺である。胴部は球形をなし、上部が甕形にやや膨らむ。口縁は短く開き、外耳上端に沈線が2条巡る。内面にはロクロ目を留める。胎土は淡褐色を呈し、釉は緑色に発色する。釉は全体に薄くかけており、肩部沈線から濃緑色の釉を垂らす。全体の1/8周強ほどの小片であるが、口唇部には2ヵ所に楕円形の目跡が残る。

101は土製品である。角柱状に作り、中実である。右半部は欠けている。器面は剥落しており、調整は不明である。胎土には砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成は良好である。

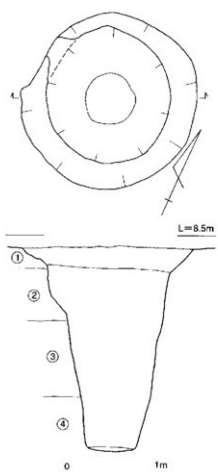


Fig.16 SE－07
実測図（1/40）

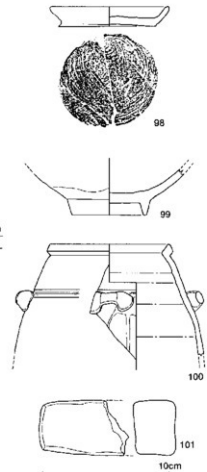


Fig.17 SE－07
出土遺物実測図（1/3）

SE－08 Fig.18 PL.4

SE－07の南に7m離れた位置に検出した井戸である。SD－02を切っている。今回の調査で検出した井戸では最大の径を持つ。掘り方の平面形は南北にやや長い円形で、南北長3.3m、東西長2.6mを測る。断面形は基底面が皿状で、胴が膨らむ形を呈し、検出面付近でラッパ状に開く。検出面から基底までの深さは2.2mである。覆土には暗褐色粘質土が詰まっていた。井戸壁面の土層は①黄褐色粘土、②暗褐色粘土、③暗褐色土と橙色粘土の混在土（軟質）、④橙色粘土と白色粘土の互層、⑤白色粘土（八女粘土層）である。③層の軟質土がえぐれており、ここが地下水位のレヴェルと見られる。現在は湧水はない。

出土遺物は量的には少ない。出土土器から、12世紀～13世紀前半に位置付けられよう。

SE－08出土遺物 Fig.19 PL.6

102は土師器坏である。器面が剥落しており調整は不明で、小片の為法量に正確さを欠く。103は土師器甑の把手である。ヘラ成形し、胎土には砂粒と雲母粒を多量に含む。104は須恵器坏蓋の小片である。口縁端部のかえりはなく、面取りするのみである。復元口径は14.7cmを測る。105は白磁椀の小片である。玉縁状に口縁を肥厚させる。胎土は淡い灰味のある白色を呈し、釉は透明性があり緑味を含む。口縁直下に釉が溜まる。106は褐釉陶器の水注である。注口のみの残片で、先端が一部欠けている。胎土は灰青色を呈し、釉はほとんど剥げ落ちている。107は滑石製の石鍋片である。口縁直下に断面台形の低い突帯を付ける。外面は縦に、内面は斜めに削りの単位が見られる。内面の削りは

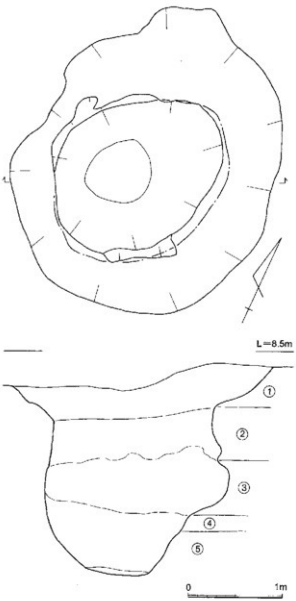


Fig.18　ＳＥ－０８実測図（1/40）

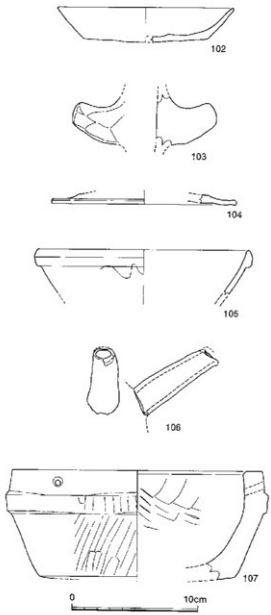


Fig.19　ＳＥ－０８出土遺物実測図（1/3）

丁寧だが外面は雑である。口縁には補修孔を一つ穿つ。突帯以下にススが付着している。

SE−16　Fig.20　PL.4

調査区中央よりやや北西よりに検出した井戸である。SD−22を切っている。今回の調査で検出した井戸の中では径、深さとも最小である。掘り方はほぼ円形プランを呈し、直径は0.9～0.95ｍを測る。基底面は径0.64～0.75ｍの東西にやや長い円形をなし、上に向かってほぼ直線的に開く。検出面から基底までの深さは1.6ｍである。覆土には暗褐色粘質土が詰まっていた。井戸壁面の土層は①黄褐色粘土（下層に鉄分が沈着）、②灰褐色粘土、③白色粘土（八女粘土層）である。えぐれはない。現在は湧水がない。基底面から0.5ｍほど浮いた状態で、土器、砥石、礫などが一括して投棄されていた。井戸が少し埋没した段階で祭祀を行い、その後埋めたものと思われる。

出土土器から、12世紀中頃～後半の井戸と考えられる。

SE－16出土遺物 Fig.21 PL. 7

108～113は土師器である。108は小皿で、底部は回転ヘラ切りである。胎土に砂粒・雲母粒を含む。ほぼ完存しており、口径9.1cm、器高1.0cmを測る。109の小皿は口縁端部を内側に折り曲げる特異な器形をなしている。底部は残りが悪いが回転糸切りである。胎土に径0.5～3mmの砂粒と雲母粒を含む。完存しており、口唇端部の径が9.0cm、最大径が9.5cm、器高が1.2cmを測る。110～112は坏である。ともにロクロ整形した後、内底面を板状工具でナデ調整し、底部は回転糸切りで板圧痕がある。法量は、110が復元口径15.4cm、器高3.0cm、111が口径15.2～15.3cm、器高2.6cm、112が復元口径15.8cm、器高3.0cmを測る。なお、111は灯明具として用いられており、口縁内部の対置する2ヶ所に灯芯を置いた痕跡が認められる。113は内外面に炭素を吸着させた黒色土器B類の椀である。高台は低く、中心からずれた位置に貼付している。二次的な加熱を受けて器面のほとんどが剝落しており、かろうじて黒色土器と知れる程度である。口径17.0cm、器高6.4cm。

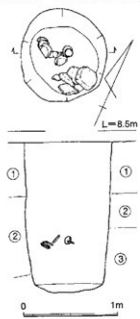


Fig.20 SE－16実測図(1/40)

114～116は瓦器である。114は小型の坏で深い。ロクロ成形で、体部下端にヘラ削りを加える。底部は回転糸切りである。胎土は精良で、焼成は良好。口唇部内面から体部外面にかけて炭素が吸着している。口縁の一部を欠く。復元口径7.3cm、器高3.1cm。115、116は小型の丸底坏である。115は内面に単位の不明瞭なヘラ磨きを施す。底部は回転糸切りで、板圧痕がある。復元口径9.1cm、器高1.9cm前後。116は器面が剝落して調整が不明瞭である。底部に板圧痕が認められ、同転糸切りか。復元口径10.4cm、器高2.0cmを測る。

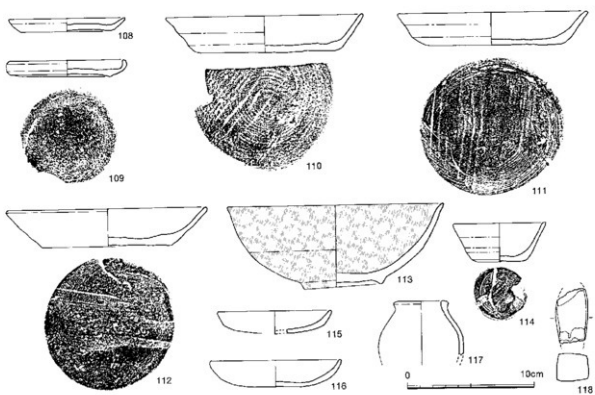


Fig.21 SE－16出土遺物実測図 (1/3)

117は青磁の小壺である。球形の体部上端を肥厚させて口につくる。胎土は淡灰色を呈し、これに淡い緑色の釉を全体に薄くかける。口唇部に目跡があり、復元口径は4.3cmである。

118は砥石片である。小型品で、上下を欠く。4側面を砥石に用いている。石材は砂岩系。

SE−17 Fig.22 PL.4

調査区中央の西壁際に検出した井戸である。調査区内で一部を検出したため、調査区を西へ拡張して調査した。今回調査した井戸の中では最も深い。掘り方はほぼ円形プランを呈し、直径は1.37mを測る。基底は径0.75mの円形に平坦面をつくり、この中央に溜升状の穴を掘る。井戸の断面形は上に向かってほぼ直線的に開く円筒形を呈する。検出面から基底までの深さは2.4mで、ここから更に0.4mの溜升状の坑を掘り下げる。坑は径0.53mの円形につくり、下面の径は0.35mである。井戸壁面の土層は①黄褐色粘土、②暗褐色粘土、③橙色粘土に暗褐色粘土が縞状に挟まる、④灰白色粘土（八女粘土層）である。壁面のえぐれはほとんどない。現在は水が湧かない。

出土土器から、12世紀代の井戸と考えられる。

SE−17出土遺物 Fig.23 PL.7

119は土師器小皿である。底部は回転糸切りで、板圧痕がある。120は内面に炭素を吸着させた黒色土器A類の椀と思われるが、器面が全て剝落しており、調整は不明である。復元口径16.0cm。121は瓦器椀である。低い高台が付く。体部の内外面に指頭痕が残る。内面は雑にヘラ磨きを施すが、外面は器面剝落のため調整不明である。122は白磁椀である。口縁を玉縁につくり、体部外面をヘラ削りしている。胎土は淡灰色で黒色の微粒子を含む。釉は緑味の強い半透明釉で、内面は薄くかける。体部外面下端は露胎である。また、口縁の内外には釉の溜りがある。全体に貫入がある。

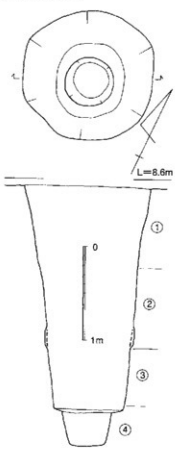


Fig.22 SE−17 実測図 (1/40)

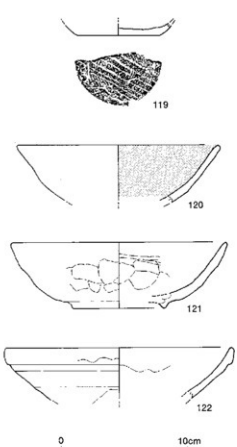


Fig.23 SE−17 出土遺物実測図 (1/3)

SE−30 Fig.24 PL.4

調査区の北東隅に検出した井戸である。SE−30のみ他の井戸と距離をおいて位置する。掘り方の平面形は南北にやや長い円形で、南北長1.8m、東西長1.5mを測る。検出面から基底までの深さは2.05mで、基底から0.5m高い位置にテラス状の段を設けている。断面形は基底面が皿状で、胴がテ

ラスのある北側へ膨らむ形を呈し、検出面付近でラッパ状に少し開く。覆土には上層に暗褐色粘質土、下層に黒色粘質土が堆積していた。井戸壁面の土層は①淡黄褐色粘土、②暗赤褐色粘土（バサつく）、③白色粘土（八女粘土層）である。現在は湧水がない。祭祀行為の痕跡があり、基底に貼り付いた状態で土師器甕（Fig.25－125）が、基底からやや浮いた状態で土師器甕（Fig.25－126）、同甑（Fig.26－135）、須恵器壺（Fig.25－132）などが出土した。

出土遺物はコンテナ3箱分である。出土土器から、9世紀代に位置付けられよう。

SE－30出土遺物　Fig.25、26　PL.7、8

123～127、135、136は土師器である。123は坏である。口縁の大部分を欠っており、器面が著しく荒れている。底部はヘラ切りである。復元口径12.4cm、器高2.9cm。124は椀である。細身の高い高台が付く。著しく器面が剝落しており、調整は不明である。125は小型の甕で、完存する。胴部には張りがなく、口縁部は緩く屈曲し外反して開く。胴部内面のヘラ削りは非常に雑に行い、外面を刷毛目調整している。胎土に砂粒・雲母粒を含む。成形があらく器形が歪んでおり、口径は18～20cm、器高は19.6cmを測る。外面は二次加熱を受け、内面には炭化物が付着し、特に口縁部には帯状に煮炊きの痕跡が残っている。126は甕で、ほぼ完全に残っている。なで肩の倒卵形胴部に、屈曲して開く口縁部が付く。胴部内面はヘラ削り調整するが、器面の残りが悪い。胴部外面は上位は縦方向の、下位は任意方向の刷毛目調整である。胎土に砂粒と母雲粒を含む。口径27.2cm、器高25.8cmを測る。127は甕の底部片である。丸底で、内面は粗いナデ調整、外面は刷毛目調整する。胎土に砂粒・雲母粒を多量に含む。135は甑である。縦に割れた1/2ほどが出土した。胴部はやや上位に最大径があり、ここに把手を付ける。口縁は直線的に伸びて端部で少し開く。全体的に器面の剝落が著しいが、胴部外面に刷毛目、内面にヘラ削りの痕跡が認められる。把手はヘラ成形している。胎土には砂粒を多量に含む。復元口径27cm、器高30.1cmである。136は甕である。口縁はほとんど開かず、胴部も張らない。口唇部は面取りする。外面は刷毛目調整、内面は胴部がヘラ削り、口縁部が横位の刷毛目調整である。胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、外面に焼成時の黒斑がある。小片の為法量は不正確であるが、135の甑とセットになる甕か。

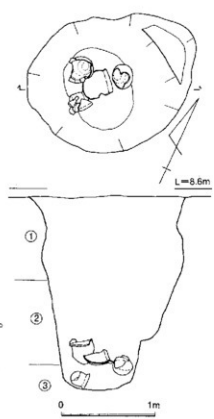


Fig.24
SE－30実測図（1/40）

128～134は須恵器である。128は坏で、底部は安定の悪い平底で、ヘラ切りする。外底に墨書があるが薄く判読しがたい。復元口径17.0cm、器高約2.6cm。129は蓋である。天井部につまみがとれた痕がある。口縁端部は少し下に垂れる。ロクロ成形後、ヘラ切りし、板圧痕を残す。内面はナデ調整を加える。復元口径14.2cm。130は坏である。底部は回転ヘラ削りを施し、高台は底部外縁よりに付けるが、板圧痕により一部潰れている。内底面にはナデを加え、重ね焼きした痕が残る。復元口径12.2cm、器高4.15cm。131も坏で高台は底部の内寄りに貼付する。底部は回転ヘラ削りの後ナデ調整する。器形に歪みがあり、復元口径12.4cm、器高3.6～3.9cmである。132は壺である。肩の張る球形の胴部に短く立つ口縁を付ける。口唇部は面取りし、端部は少し外へ張り出す。ロクロ成形の後、伏せ置きし、時計回りに土器を回しながら胴部下半から底部にかけてヘラ削りを加え、輪高台を貼付している。ま

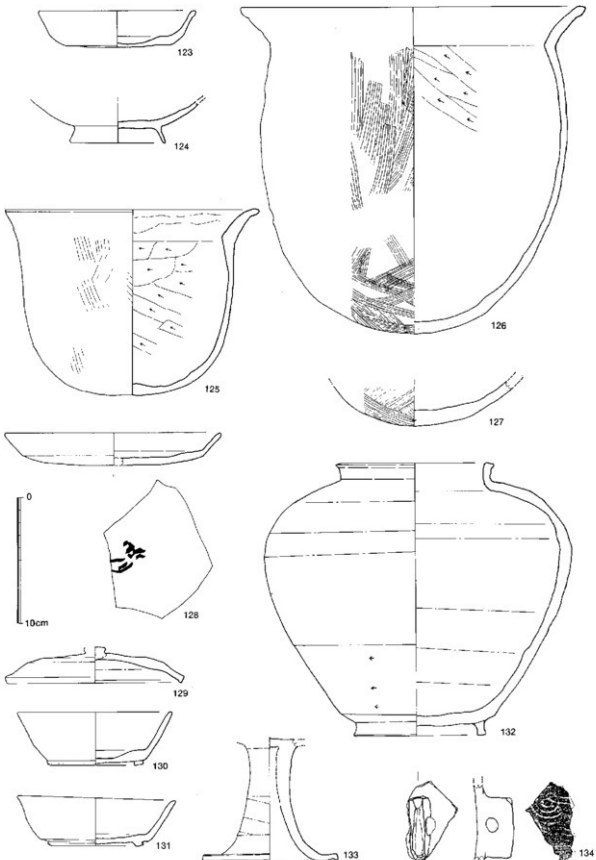


Fig.25　ＳＥ－３０出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

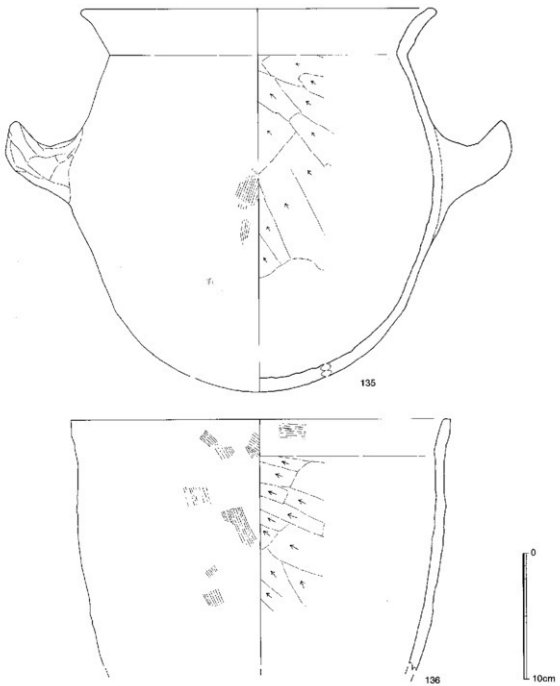


Fig.26　ＳＥ－３０出土遺物実測図Ⅱ（1/3）

た、肩部外面はヘラ状の工具で横ナデを加え、内面は下から上へ向かって部分的なナデ調整を施す。口縁部から肩部にかけての一部を失っており、復元口径は12.5cm、器高は21.4cmを測る。133は高坏の脚部である。脚を坏底に貼り付けて接合している。裾端がやや上にそり、端部で肥厚させて断面三角形につくる。ロクロ成形し、坏部内底にはナデ調整を加える。134は壺の外耳であろう。方柱状に薄くつくり、円形の孔を開け、壺に貼付ける。ヘラ成形である。壺の内面は同心円文のアテ具痕に、横方向のカキ目をあてる。

SE－34 Fig.27　PL. 4

SE－17の南に4ｍ離れて位置する井戸である。土坑SK－18に切られており、その底面で検出した。大半が調査区外にあったため拡張して調査を行った。掘り方の平面形は南北にやや長い円形で、長径1.9ｍ、短径1.4ｍを測る。検出面から基底までの深さは2.6ｍで、基底面も南北に長い円形を呈し、長径1.2ｍ、短径1.0ｍである。本来は円筒形の井戸であるが、壁面が崩壊して、断面形は胴が膨らむ形をなし、検出面付近で少し開く。井戸壁面の土層は①黄褐色粘土（粘性が強い）、②暗褐色砂質土、③赤褐色粘土と暗褐色粘土の互層（砂、パミスを含む）、④白褐色粘土（八女粘土層）である。③層から②層下にかけて壁面がえぐれており、井戸の水位を示している。現在は湧水がない。

出土土器にはやや古手の土器が混じるが、12世紀代の遺構と考えられる。

SE－34出土遺物 Fig.28　PL. 8

137～140は土師器で、いずれも器面が剥落しており調整が不明である。137は小皿に復元したが、凝口縁の可能性がある。底部は回転ヘラ切りである。138は坏である。底部は回転ヘラ切りである。139は坏で、体部は内湾する。復元口径16cm。140は土師器椀である。低い高台を付ける。

141は瓦器椀で、内外面にヘラ磨きを施すが、内面はヘラの単位が明瞭でない。復元口径17.6cm。

142、143は須恵器である。142は坏の底部片で、内傾する高台を付ける。底部は回転ヘラ切りで、内底はナデ調整。143は高坏の脚である。ロクロ成形し、脚を坏底に貼り付ける。坏部内面はナデ調整、外底はヘラ先で調整する。

144～146は白磁椀である。144は底部片で、高台は外側を面取りする。胎土は白色で密。釉は透明で、薄く緑味を含み、貫入がはいる。145は口縁部で、端部の玉縁は面取りし、角張る。胎土は白色を呈し、密。釉は不透明な白色で、内面に溜まりがある。体部下半は露胎である。146も口縁部で、玉縁は丸い。胎土は白灰色で密。釉は緑味のある透明釉で、体部下半は露胎である。口縁外面に融着物を剝ぎ取った痕跡があり、釉が剝がれている。

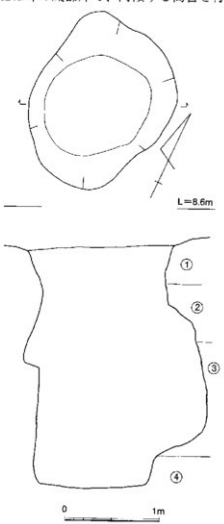


Fig.27　SE－34
実測図（1/40）

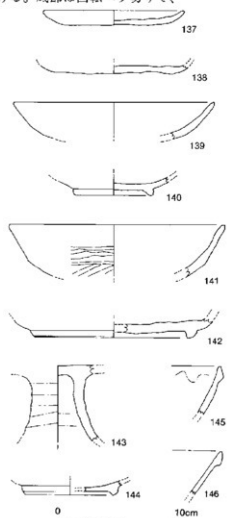


Fig.28　SE－34
出土遺物実測図（1/3）

（4）土坑

SK－06 Fig.29

調査区南西壁近くで検出した土坑である。SD－05を切る。長円形で浅く、長径1.45m、短径1.05m、深さ0.1mを測る。出土遺物にはSD－05に伴うものが含まれ、土師器の甑等が出土している。中世の遺構であろう。

SK－15 Fig.29

調査区南端部に検出した隅丸長方形の土坑である。南北に長く、1.0×0.7m、深さ0.2mで、覆土には有機質の黒色土がつまっていた。遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。

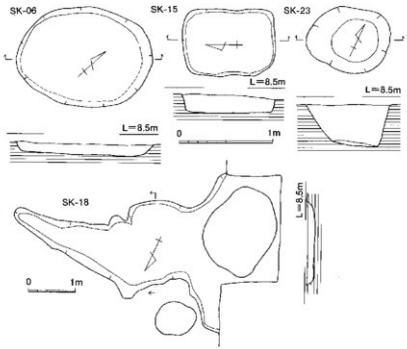


Fig.29 ＳＫ－０６、１５、１８、２３実測図（1/40、1/80）

SK－18 Fig.29

調査区中央西壁際に検出した。不定形を呈しており、西へ伸びる溝の一部かも知れない。深さは0.3mで、この土坑の底面においてSE－34を検出した。古代、中世の遺物が出土している。中世の遺構で、あるいはSE－34と関連を持つものか。

SK－18出土遺物 Fig.30 PL.8

147は須恵器で、脚に復元したが長頸壺の可能性が強い。端部を面取りし、外面には三段に沈線をまわす。遺構の時期を示す土器ではない。

SK－23 Fig.29

SK－18の北隣に検出した小土坑である。東西に長い長円形で、0.9×0.7m、深さ0.45mを測る。磨滅した土器片が少量出土した。中世の遺構であろう。

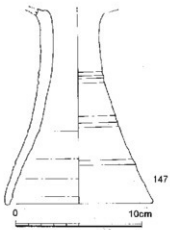


Fig.30 ＳＫ－１８出土遺物実測図（1/3）

5．小結

古代の遺構は井戸１基のみであるが、中世の遺構中に古墳時代後期と古代（９～11世紀）の遺物が多量に含まれており、調査地の西側にこの時期の遺構が広がるものと思われる。中世の遺構は掘立柱建物１、溝６、井戸５、土坑３で、11世紀後半～13世紀代のものである。遺構は調査区の西に偏って検出され、前時代と同様調査地点の西側に集落が存在するものと思われる。遺構中からは輸入陶磁器が比較的多量に出土しており、この集落が博多部と密接な交流を持っていたことを物語っている。

第３章　第４９次調査の記録

１．調査に至る経過

1993年11月22日、日下部隆則氏から本市に対して博多区東光寺１丁目148,147の一部における共同住宅の建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの那珂遺跡群の北側に位置し、申請地の北東側には第29次調査が、北西側には比恵遺跡群第46次調査が位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1994年４月26日に試掘調査を実施した。現況は畑地で、調査の結果、耕作土直下の鳥栖ローム上面にて遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積610㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。日下部隆則氏と福岡市との間に発掘調査および受託契約を締結し、調査は1994年9月5日から同年11月２日まで行われた。

２.調査の組織

調査委託　日下部隆則
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛
調査総括　文化財部長　後藤直
　　埋蔵文化財課長　折尾学（前任）
　　埋蔵文化財課第２係長　山崎純男（前任）
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　内野保基　吉田麻由美（前任）西田結香
調査担当　埋蔵文化財課第２係　加藤隆也
試掘調査　菅波正人
調査作業　池田省三　上野龍夫　梅木繁良　越智信孝　川崎豊　徳永栄彦　中川敏男　平田穂積
　　廣田安平　松井一美　三浦力　右寺栄次　室威志　森山恭助　石川洋子　今別府序子
　　岩本三重子　澄川アキヨ　舎川キチエ　中川原美智子　永松伊都子　永松トミ子
　　中村フミ子　鍋山治子　野口ミヨ　播磨千恵子　日尾野典子　藤野トシ子　宮本順子
　　森山キヨコ　森山タツエ　山村スミ子　吉野幸子　鷲尾美佐子
整理作業　加集和子　平野徳子　山本良子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等において日下部隆則氏をはじめとするみなさまには多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

3．調査の概要

現況は畑地である。30～50cmの耕作土を重機により剝ぎ、鳥栖ローム上面にて遺構を検出した。検出遺構は竪穴住居８棟、掘立柱建物３軒、井戸１基、土壙・土坑５基、溝14条、柱穴等である。遺構の残存は良好であった。

4．遺構と遺物

（1）竪穴住居跡（ＳＣ）

今回の調査では８基の竪穴住居を検出した。そのうちＳＣ－０１、０４、０５、０６、０８は調査区外側に遺構が広がる。遺構の時期はＳＣ－０１、０２、０３、０５、０７、０８が弥生時代終末から古墳時代初頭，ＳＣ－０４は６世紀代に位置づけられるものである。

ＳＣ－０１（Fig.33、ＰＬ.10）

調査区東側に位置し、遺構の北側は調査区外に延びる。住居の南側には幅90cmのベット状遺構をもち、壁際には幅10cmの壁溝が巡る。主柱穴と思われる遺構は調査区内では確認されなかった。平面形は調査区内では不明だが出土遺物の時期とベッド状遺構を有することから長方形を呈すると思われる。

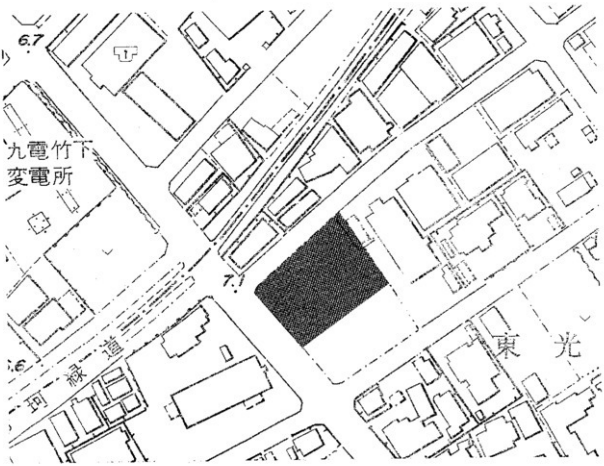


Fig.31　第４９次調査地点位置図（1/1,250）

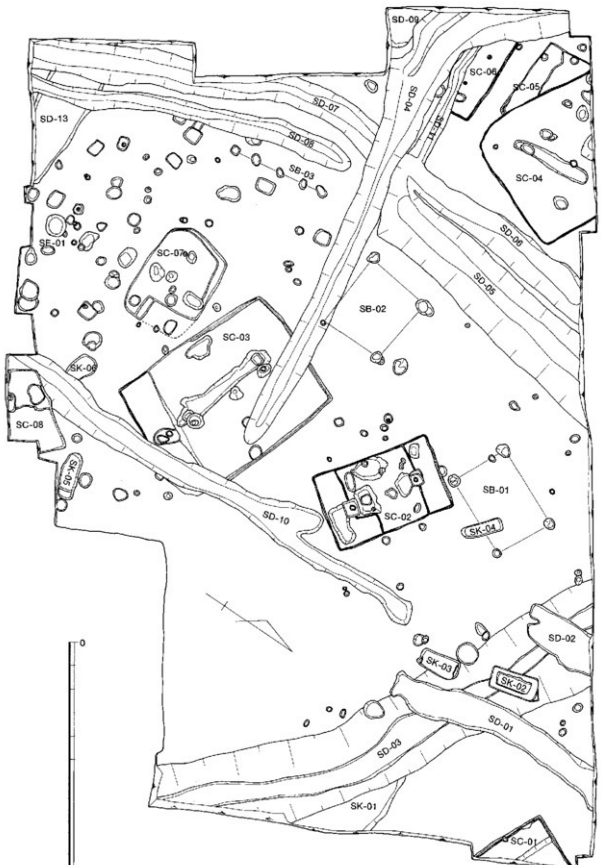


Fig.32　第４９次調査検出遺構配置図（1/160）

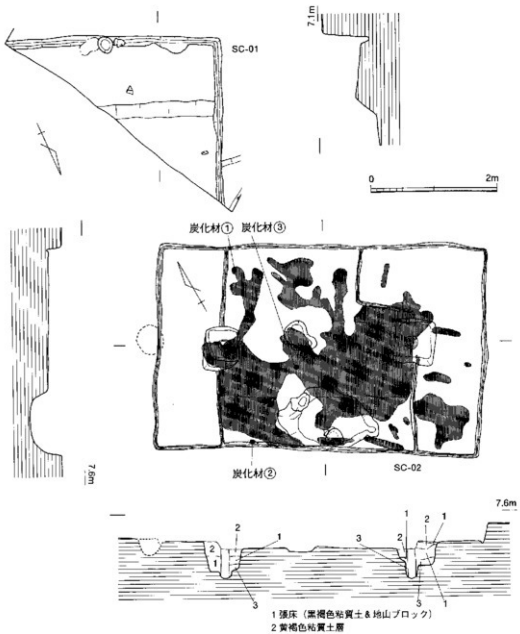


Fig.33　ＳＣ－０１、０２実測図（1/60）

出土遺物（Fig.37）

覆土中から一袋程度の遺物が出土したが、小破片が多く図化できたのは１点のみである。１は甕の口縁から胴部にかけてである。口径は19.4cmを測り、口縁端部は外側に外反する。器面は磨滅が著しいが、外面にハケ目調整が施されている。遺構の時期は遺物から古墳時代初頭に位置づけられる。

ＳＣ－０２（Fig.33、ＰＬ.10,13）

調査区東寄りに位置し、長辺5.2m、短辺3.2mを測る。住居内の西側に幅約１mと東側にＬ字状に幅1.1mのベッド状遺構を有する。中央には50×35cmの炉があり、主柱穴は２本で、その平面形は方形の堀かたをもつ。主柱を立ててから、その堀方がベッド状遺構にかかる部分は一段高く床を張っている。南側の壁際には1.5m×95cm、深さ26cmの土坑がある。焼失家屋と思われ床面に炭化物、焼土が見ら

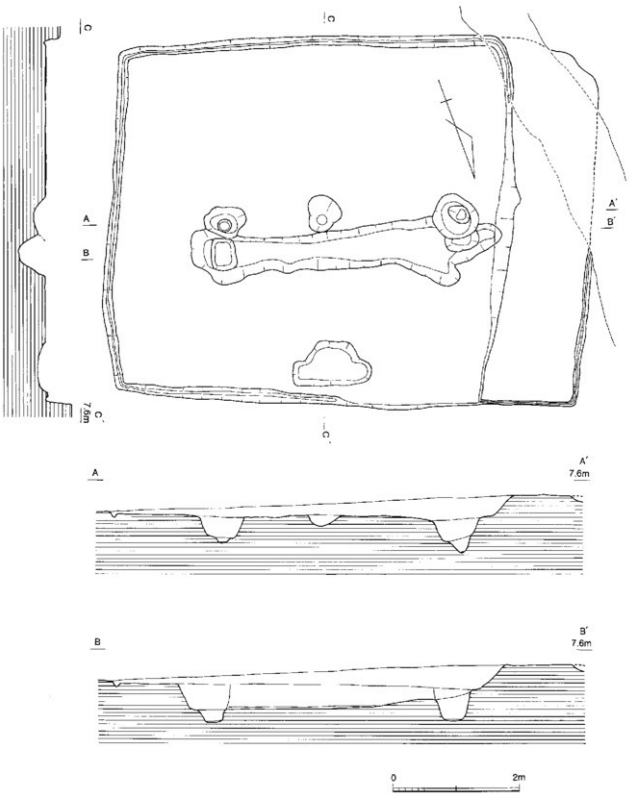


Fig.34　ＳＣ－０３実測図（1/60）

れた。遺物は主に炭化物の上面において検出され、床面直上においては墨の底部のみが確認された。

炭化材の残存が良好であったためサンプルを３点採集し、古環境研究所に樹種同定を依頼した。分析結果は第３章６に記載する。

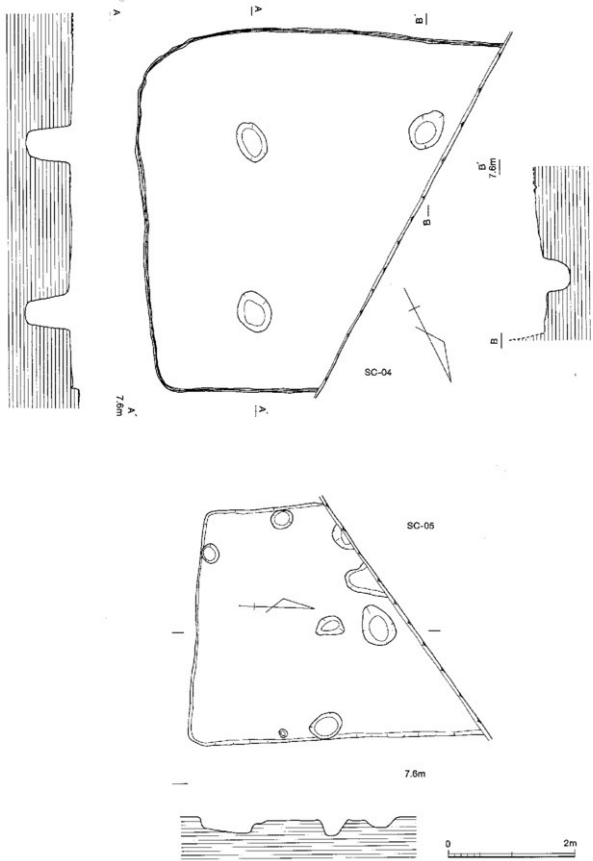


Fig.35　SC－04、05実測図（1/60）

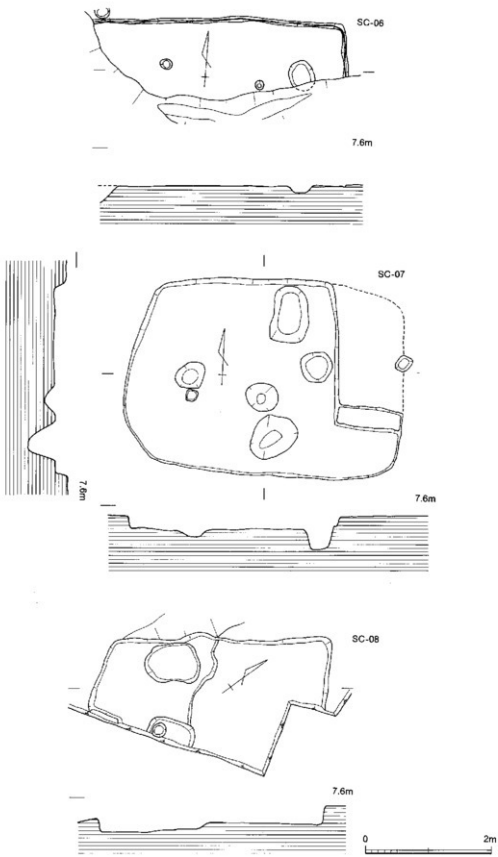


Fig.36　ＳＣ－０６、０７、０８実測図（1/60）

出土遺物（Fig.37）

2は壺の口縁から胴部にかけての破片である。口径14.8cmを測り、胴部の最大径は上部にある。器面調整は磨滅が著しく不明である。3は高坏である。口径31.0cmを測り、口縁部が坏上半から大きく開く。4の甕はくの字状をなす口縁部をもち、口径42.4cm、器高42.9cmを測る。口縁部の外面屈曲部直下に貼付け刻目凸帯を巡らし、胴部中央から上に最大径をもち、胴部下位に張付け刻目凸帯を巡らす。底部は丸くつくる。器面調整は内外面ハケ目を、外底部にヘラ削りを施す。5の甕は床面から出土した。底部を丸くつくるもので、外面の器面調整は磨滅しており不明だが内面にはハケ目がのこる。6は砥石である。表裏に使用の痕跡が残るが、面の一方が欠損している。遺構の時期は遺物から古墳時代初頭に位置づけられる。

ＳＣ－０３（Fig.34、ＰＬ.10）

調査区中央南よりに位置し、東側角をＳＤ－１０に切られている。平面形は長方形を呈し長辺7.7m、短辺5.9m、深さ40cmを測る。壁際には幅５～10cmの壁溝が巡り、住居の東側には幅1.3mのベッド状遺構を有する。主柱穴は２本で、柱間は2.5mを測り、中央には35×40cmの炉がある。南側の壁際には85×45cm、深さ16cmの土坑がある。２本の主柱穴に切られて布掘状の溝と２本の柱の堀方が確認された。柱間は2.6mを測り、位置も一致することから建物の建て替えが行われたと考えられる。覆土から鉄斧１点、鉄製鑿先と鉄製鎌が錆着して出土している。

出土遺物（Fig.37）

7は複合口縁壺の口縁である。8は甕の口縁である。9は台付き鉢もしくは坏で、上部を欠損している。底径は6.0cmを測り、外面は磨滅しているが台部内面にはハケ目調整が施されている。10は鉄製鋤先と鉄製鎌と思われるものである。鋤先の現存長は5.3cm、幅13.8cmを測る。鎌は現存で長さ2.1cm、幅10.2cmを測る。11は鉄斧である。残存長8.5cm、幅4.0cmを測る。遺構の時期は遺物から古墳時代初頭と考える。

ＳＣ－０４（Fig.35、ＰＬ.10）

調査区北壁西端に位置し、遺構の北側は調査区外に延びる。ＳＣ－０５を切り、一辺3.85mを測る。２つの住居の角が確認されたが片方はやや丸みをもち、もう片方はそれより鋭い。壁際には幅５cmの壁溝が巡る。主柱穴は４本と思われ３本が確認されている。床面直上に灰白色粘土と炭化物が見られ住居北側の壁際においてカマドの存在が想定される。

出土遺物（Fig.38）

図化できる須恵器は合計13点出土した。16～23は須恵器の坏蓋である。16は口径13.8cm、器高4.0cmを測る。17は口径13.6cmを測り端部がやや内湾する。器高3.8cmを測る。床面から出土した。18は口径14.0cm、器高4.1cmを測り、床面直上にて出土した。19は口径14.0cmを測り床面より出土した。20は口径14.8cm、器高5.0cmを測る。21は口径13.6cmを測り、床面から出土した。22は口径13.4cm、器高4.0cmを測り、天井部にヘラ記号がある。23は口径13.8cm、器高4.6cmを測り、天井部にヘラ記号がある。24～27は須恵器坏身である。24は口径13.2cm、器高3.5cmを測り、カエリ部は内反して立ち上がる。25は口径13.9cm、器高3.8cmを測り、床面から出土した。26は口径14.8cm、器高4.8cmを測る。27は口径15.2cm、器高4.6cmを測り、床面から出土した。28は高坏の脚部で、坏部は欠損して

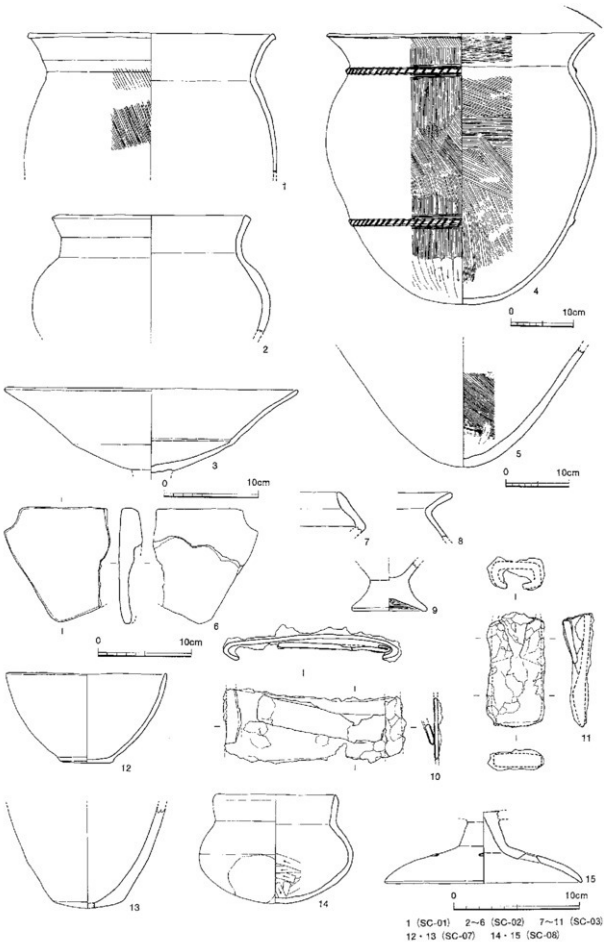


Fig.37　住居出土遺物Ⅰ（ＳＣ－０１、０２、０３、０７、０８）(1/3,1/4,1/6)

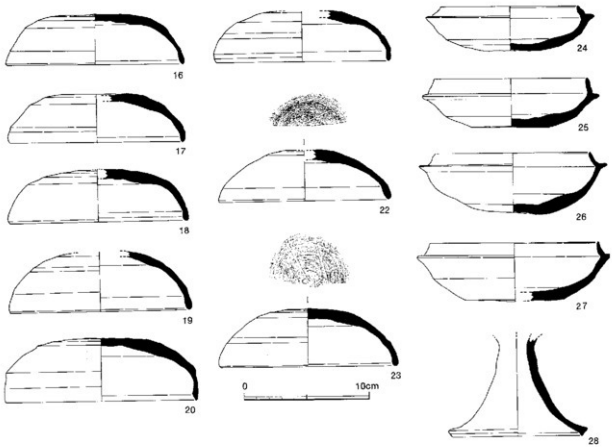


Fig.38　住居出土遺物Ⅱ（ＳＣ－０４）(1/3)

いる。底径は10.8cmを測り、器面は磨滅している。他に土師器の甕の胴部等の破片も出土しているが、図化できるものはない。遺構の時期は出土遺物から６世紀に位置づけられる。

ＳＣ－０５（Fig.35、ＰＬ.10）

調査区北壁西端に位置し、ＳＣ－０４と切り合う。遺構の北側は調査区外に延びる。平面形は長方形を呈すると思われ、短辺の東西は2.5ｍ、長辺の南北は3.2ｍ以上、深さ15cmを測る。主柱穴は２本で長辺の中心軸上に主柱穴と思われる柱穴を１穴確認された。住居南側において幅30～40cm、深さ10cmの浅い段が見られるが遺構の性格は不明である。ＳＣ－０４と大きく切り合うことと遺構の残存が浅かったこともあり良好な遺物は確認されなかった。時期は住居の平面形等から弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

ＳＣ－０６（Fig.36、ＰＬ.10）

調査区北西ＳＣ－０５の南側に位置し、ＳＤ－１１に大きく切られる。１つのコーナだけのものだが角をしっかりともつ。住居の壁際には幅５cmの壁溝が巡る。平面プランは方形を呈するが、その規模は不明である。主柱穴等の構造も不明である。図化できる良好な遺物は確認されなかった。

ＳＣ－０７（Fig.36、ＰＬ.10）

調査区南側、ＳＣ－０３の南側に位置する。短辺2.1ｍ、長辺2.6ｍ、深さ26cmを測り、コーナは

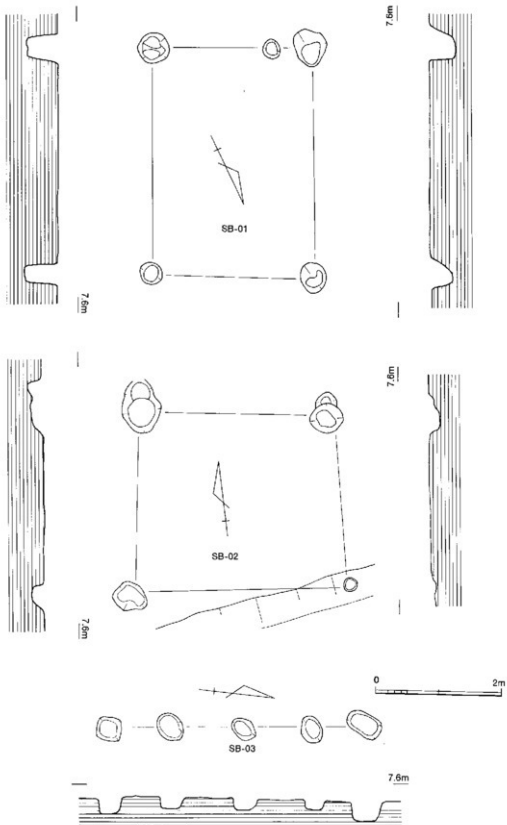


Fig.39　ＳＢ－０１、０２、０３実測図 (1/60)

丸みをもつ小型の遺構である。東側に幅70cm、長さ1.5mのベッド状遺構を有する。主柱穴は2本で、住居内中央やや南よりに30×30cmの炉と思われるくぼみが見られる。遺構の時期は遺物から弥生時代終末に位置づけられる。

出土遺物（Fig.37）

12は鉢である。口径12.5cm、底径4.1cm、器高7.1cmを測り、器面調整は磨滅している。13は壺もしくは甕の底部である、レンズ状につくっている。

ＳＣ－０８（Fig.36、ＰＬ.10）

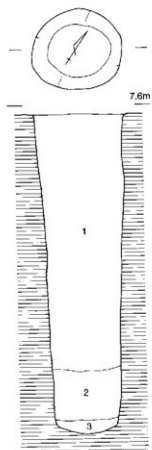
調査区南端にて確認された。住居の南側は調査区外へ延びる。１辺2.4mを測り、南西側に深さ約10cmの段をもつ。主柱穴は確認できなかった。遺構の時期は弥生時代終末に位置づけられる。

出土遺物（Fig.37）

14は壺である。口径9.4cm、器高8.6cmを測る。内面上面はナデ調整し、下部はヘラ削りを施す。外面の器面調整は磨滅のため不明であるが下部に煤の付着がみられる。15は高坏の脚である。底径は15.6cmを測る。

（2）掘立柱建物（ＳＢ）

今回の調査では190個を越える柱穴を検出し、97個の柱穴から遺物を確認した。そのうち建物として復元できたのは２棟と１列である。建物の分布は調査区南側にも更に広がるものと予想される。



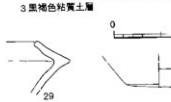


Fig.40　ＳＥ－０１実測図、出土遺物
(1/40,1/3)

ＳＢ－０１（Fig.39）

調査区北側、ＳＣ－０２の北側に位置する１間×１間の建物である。主軸方位はＮ-25°-Ｅを測る。柱穴は直径23～40cmの不定形で、深さ34～52cmが残存する。規模は梁行2.4×桁行1.7mを測る。図化できる遺物は出土していないが弥生土器の小破片が出土している。

ＳＢ－０２（Fig.39）

ＳＣ－０３の西側に位置する１×１間の建物である。ＳＤ－０４に切られる。主軸方位はＮ-84°-Ｅを測る。柱穴は直径15～40cmの不定形で、深さ4～19cmが残存する。規模は梁行2.3×桁行1.9mを測る。遺物は弥生土器片が出土している。

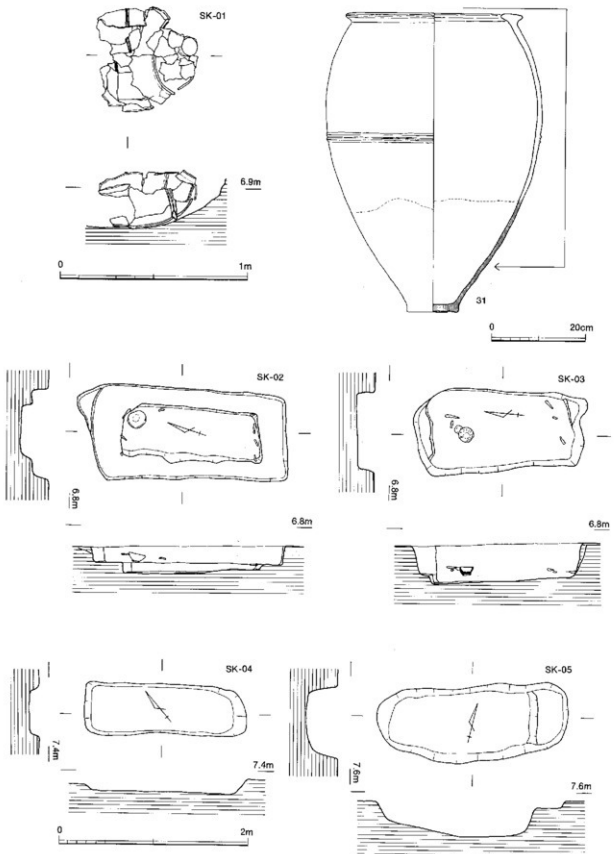


Fig.41　SK実測図、SK出土遺物Ⅰ（1/8、1/20、1/40）

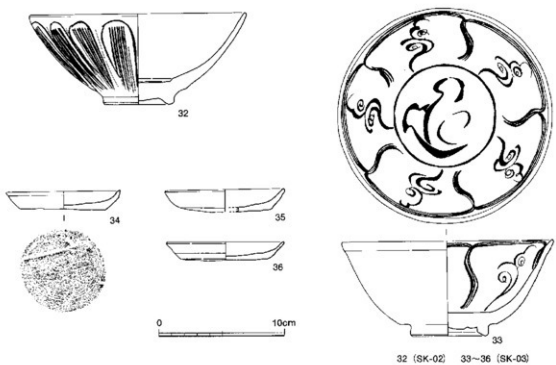


Fig.42　SK出土遺物Ⅱ (1/3)

SB－03 (Fig.39)

位置する建物の柱穴列である。主軸方位はN-6°-Eを測る。柱穴は直径20～40cmの不定形で、深さ17～30cmが残存する。規模は各柱間60～75cm、全長2.8mを測る。この列の西側には対応する柱穴が確認されないことから東側に展開するものと考えられる。

(3) 井戸 (SE)

今回の調査では1基の井戸を検出した。

SE－01 (Fig.40)

調査区の南西にて検出された。平面形は不整の円形を呈し最大長94cm、残存する深さは3.4mを測る。下場の径は60cmを測り、直線的に立ち上がる。最下層には黒褐色粘質土が堆積していた。遺構の時期は弥生時代終末に位づけられる。

出土遺物 (Fig.40)

29は複合口縁壺である。小破片のため口径は復元できない。30は壺あるいは甕の底部である。底をレンズ状につくっている。

(4) 埋葬土壙・土坑 (SK)

SK－01 (Fig.41、PL.11)

調査区北側に位置し、SD－03に切られる。31は弥生時代中期の甕棺である。口径37.6cm、底径10.8cm、器高63.1cmを測る。一つの甕の下方部分を打ち欠き、その口縁にかぶせて蓋にしたものである。整理段階で接合されて一個体に復元された。調査段階では下甕の胴部下はSD－03によっ

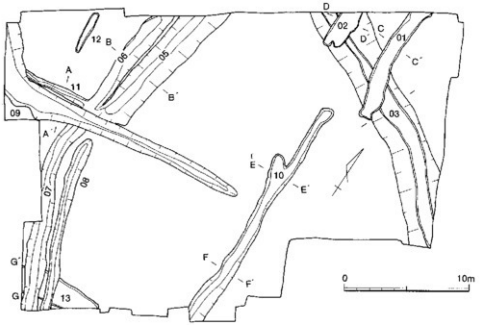


Fig.43 溝（SD）遺構配置図（1/300）

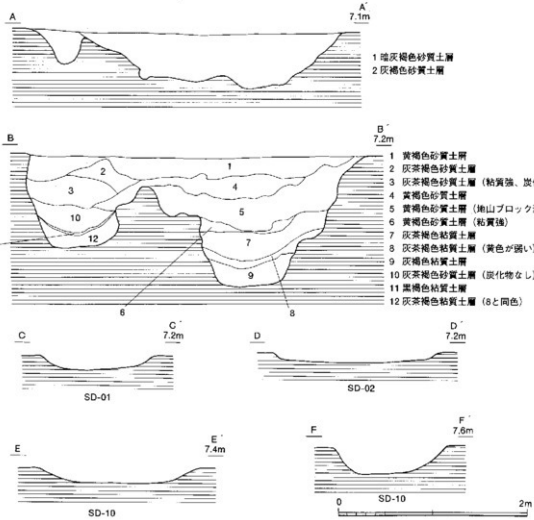


Fig.44 SD断面図Ⅰ（1/40）

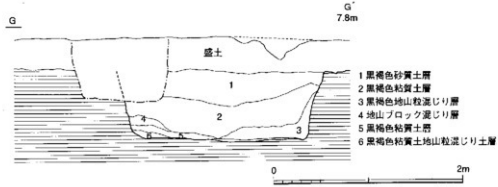


Fig.45　SD断面図Ⅱ (1/40)

て削り取られているものと考えられたが、接合されたことによりSD－03は甕棺本体とは切り合わないことが確認された。副葬遺物等は検出されなかった。甕棺より弥生時代中期後半に位置づけられる。

SK－02（Fig.41、PL.11）

調査区北側に位置し、SD－03を切る。平面形は長方形を呈し、長辺2.1m×短辺95cm、深さ30cmを測る。堀方の内側に長辺1.4m×短辺60cm、深さ13cmの段があり、それにあわせて鉄釘が検出されたことから木棺を掘えるための段であることが考えられる。副葬遺物が墓壙の北側に副葬していることから被葬者の頭位が北を向いていることが考えられる。また、遺物が墓壙の床面から浮いていることから棺上に副葬された可能性が高い。

出土遺物（Fig.42、PL.12）

32は龍泉窯系青磁碗の完形品である。口径17.2cm、底径5.6cm、器高7.2cmを測る。釉の色は薄いオリーブ色を呈する。外面には13枚の蓮弁を片切彫りし、その後カキ目を施す。内面見込みに段を有する。その他の副葬遺物はみられない。出土遺物から13世紀初頭の遺構と考えられる。

SK－03（Fig.41、PL.11）

調査区北側、SK－02の南側に位置する。平面形は長方形を呈し、長辺1.8m、短辺75cm、深さ40cmを測る。鉄釘が出土していることから木棺であることが明らかとなり、その規模は1.3m×50cm程度が想定される。副葬遺物はSK－02同様北側に限られ頭位も北向きであると考えられる。また、遺物が床面上にないことから棺上に副葬された可能性がある。

出土遺物（Fig.42、PL.12）

33は龍泉窯系青磁碗の完形品である。口径16.8cm、底径6.4cm、器高7.6cmを測る。釉の色は濃いオリーブ色を呈する。内面を片切彫りで5等分し、飛雲文を片切彫りし、内面見込みにキノコ状の文様を描く。34～36は土師器小皿である。すべて外底は糸切りである。出土遺物から13世紀初頭と考えられる。

SK－04（Fig.41、PL.11）

調査区北側、SC－02の北側に位置する。平面形は不整の長方形を呈し、長辺1.7m×短辺53cm、深さ12cmを測る。床面は平坦で緩やかに立ち上がる。図化できる遺物は出土しなかった。

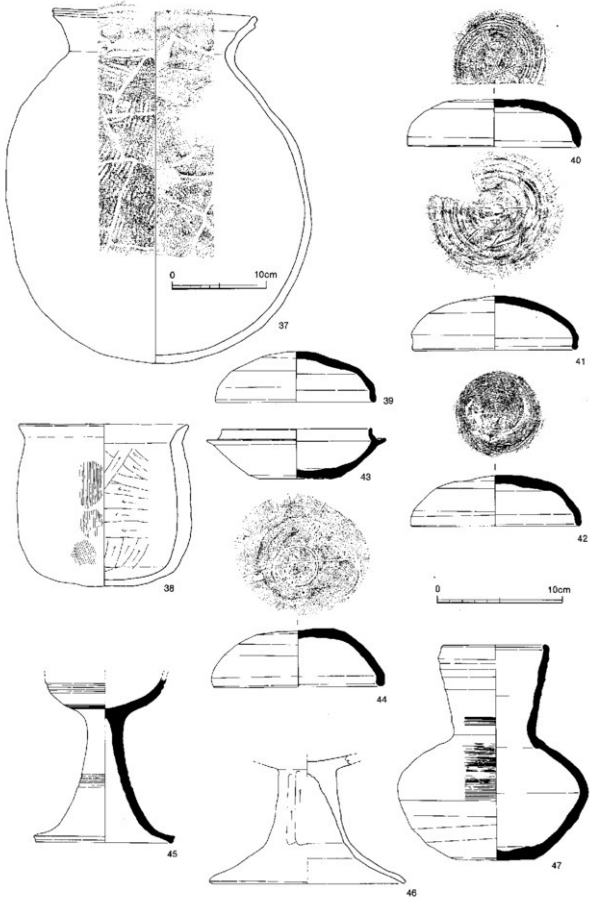


Fig.46　SD－13出土遺物 (1/3,1/4)

ＳＫ－０５（Fig.41）

調査区南側、ＳＣ－０８の北側に位置する。平面形は不整の長方形を呈し、長辺2.0m×短辺77cm、深さ40cmを測る。遺構の東側に15cmの段を有する。図化できる遺物は出土しなかった。性格は不明である。

（５）溝（ＳＤ）

今回の調査では11条の溝を検出した。遺構の時期は弥生時代終末から近世にまで至る。

ＳＤ－０１（Fig.44）

調査区の北東にて検出された溝である。幅1.2m、残存高15cmを測る。木棺墓の方向と同じくし、また覆土も灰褐色砂質土でＳＫ－０４、０５の埋土に近似する。図化できる遺物は出土していない。位置関係と覆土から木棺墓と同時期と考える。

ＳＤ－０２（Fig.44）

調査区の北東にて検出された。ＳＤ－０１にほぼ平行し、磁北をとる溝である。幅1.7m、残存高10cmを測る。遺物は出土していないが位置、規模、覆土などからＳＤ－０１と同時期と考える。

ＳＤ－０４（Fig.44）

東から西に向け流れる溝である。西の端において大きく北側に流れを変える。今回検出された遺構のすべてを切っている。染め付けの小破片が出土しており、近世以降の溝と考えられる。

ＳＤ－０５、０６、０７、０８、１１（Fig.44）

南から北に向け、やや東に湾曲して流れる溝である。断面「Ｕ」字形を呈するＳＤ－０７はＳＤ－０６と同一の遺構であるが、０６は調査区北側で立ち上がる。底のレベルからＳＤ－０４が切る部分を西に流れると考える。ＳＤ－０５とＳＤ－０８は平面上方向を同じにするが、０８は北側で立ち上がり、０５は南側にて西側に屈曲してＳＤ－１１につながる。また、ＳＤ－０５とＳＤ－０６の断面観察から２条の溝は同時期に存在したと考える。出土遺物はきわめて少ないがＳＤ－０５下層から白磁の碗が出土している。この碗は内面見込みを輪状にカキ取っており、時期は15世紀以降に位置づけられる。

ＳＤ－０９

ＳＤ－０４に大きく切られており、断面「Ｕ」字形を呈する溝である。遺物は確認されなかったが、覆土から中世の遺構と考える。

ＳＤ－１０（Fig.44）

南から北に流れる溝である。方向をＳＤ－０１、ＳＤ－０２と同じくし、覆土も近似することから同時期の遺構と考える。

ＳＤ－１３（Fig.45）

調査区南西にて西から東に向かって検出された。Ｎ－95°－Ｗをとる。ＳＤ－０７、０８に切られる。検出面で幅210cm、深さ70cmを測り、箱形に掘られた溝である。上下に分けて掘削し遺物を取り

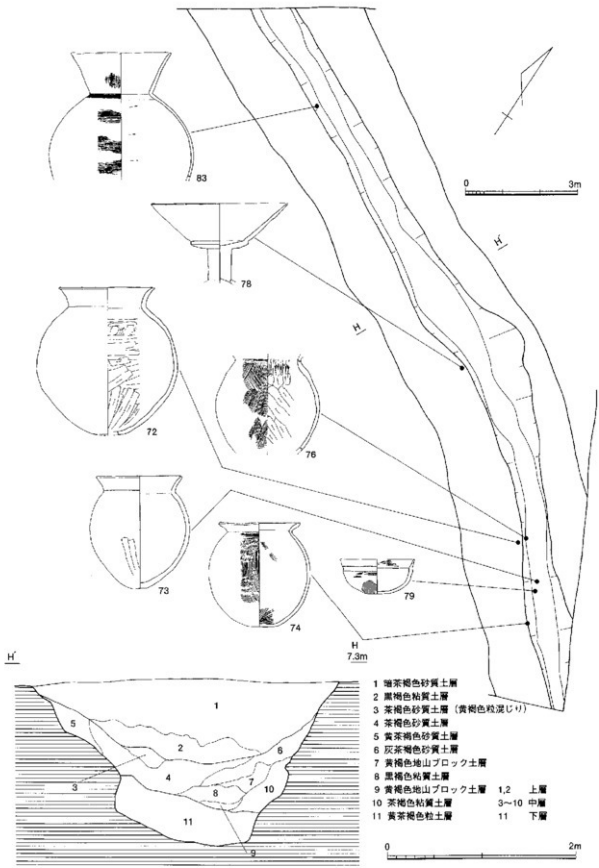


Fig.47　ＳＤ－０３遺物出土地点、断面図（1/100、1/40）

上げた。遺構の時期は6世紀後半に位置づけられる。

上層出土遺物（Fig.46、ＰＬ.12）

土師器と須恵器が出土している。37は赤焼けの甕である。口径21.8cm、器高37.5cmを測る。器面は赤褐色を呈し、外面を荒いタタキ目、内面には直線的な受けの痕跡が残る。胴部の最大径はほぼ中央にあり、底部は丸く、口縁は緩く立ち上がり外側に段をもつ。38は土師器の甕である。口径13.5cm、器高12.9cmを測る。底部は平坦で胴部は直線的に立ち上がり、口縁は外反させる。外面の器面調整はハケ目、内面は頸部以下ヘラ削りを施す。39～42は須恵器の坏蓋である。39は口径12.8cm、器高3.9cmを測り口縁端部を厚くつくる。40は口径13.6cm、器高3.8cmを測り、外面天井部にヘラ記号がある。41は口径13.2cm、器高4.2cmを測り、外面天井部にヘラ記号がある。42は口径13.1cm、器高3.9cmを測り、外面天井部にヘラ記号がある。43は須恵器の坏身である。口径14.0cm、器高4.0cmを測る。外面底部にヘラ記号がある。

下層出土遺物（Fig.46、ＰＬ.12）

土師器と須恵器が出土しているが、土師器は小破片のため図化できなかった。44は須恵器の坏蓋である。口径13.2cm、器高4.6cmを測り、外面天井部にヘラ記号がある。45は須恵器の高坏である。底径10.6cmを測る。坏部に２条、脚部に３条の沈線を巡らす。46は高坏の脚部である。脚端部は大きく外反する。底径15.6cmを測り、外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラ削りで器面調整している。47は須恵器の壺である。平底で胴部の最大径は中央よりやや上方にあり頸部は外反しながら直線的に延びる。口縁端部はやや内湾する。

ＳＤ－０３（Fig.47、ＰＬ.11）

本溝は調査区の東側に位置する。Ｎ－60°－Ｗの方向をとり、緩やかに南側に弧を描く。ＳＫ－０１を切り、ＳＤ－０１・０２、ＳＫ－０２・０３に切られる。検出面での幅3.5～3.9ｍを測り、深さ1.7～1.9ｍを測る。

掘削は、まず土層観察用のトレンチを設定し土色・土質から上層、中層、下層に３分した。層位は調査範囲内においては基本的に変化しないことと調査期間の関係から、スコップにより25～30cmの深さで１段ずつ掘削し、対応する層位名をもって遺物を取り上げた。中層においては上位遺物を中層ａ、下位の遺物を中層ｂとした。

上層遺物（Fig.48、ＰＬ.12）

土師器、須恵器が出土している。48は須恵器の壺である。焼成が不良のためか色調は灰白色を呈する。口頸部は緩やかに外反し、口縁は玉縁、口径17.2cmを測り、最大径は胴部中央よりやや上方にある。胴部外面は平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。49は鉢である。口径12.6cm、底径3.2cm、器高6.4cmを測る。底部には平坦さが残り、緩やかに内湾しながらのびる。外面はハケ、内面はナデで器面調整をおこなっている。50は支脚である。器壁を厚くつくり、上方に穿孔している。外面にはタタキ目、内面にはシボリ痕がのこる。51は須恵器の壺の蓋である。口径12.3cm、器高3.5cmを測る。天井部は平坦で屈曲して緩やかに立ち上がり口縁内側に段がつく。52は須恵器の坏蓋である。口径13.4cm、器高4.0cmを測り、口縁内側に段をもつ。53は須恵器坏蓋である。口径14.0cm、器高4.1cmを測り、体部と口縁部の境に浅い沈線がある。口縁は端部をやや内湾し、内側に段がつく。

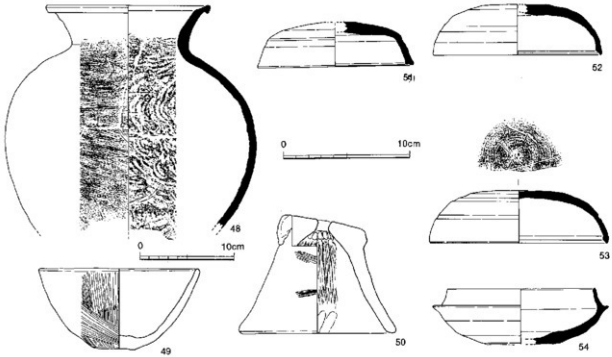


Fig.48　SD－03上層遺物実測図（1/3、1/4）

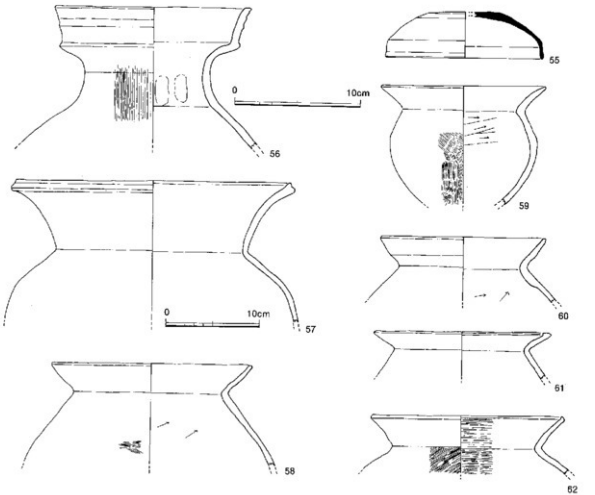


Fig.49　SD－03中層a遺物実測図Ⅰ（1/3、1/4）

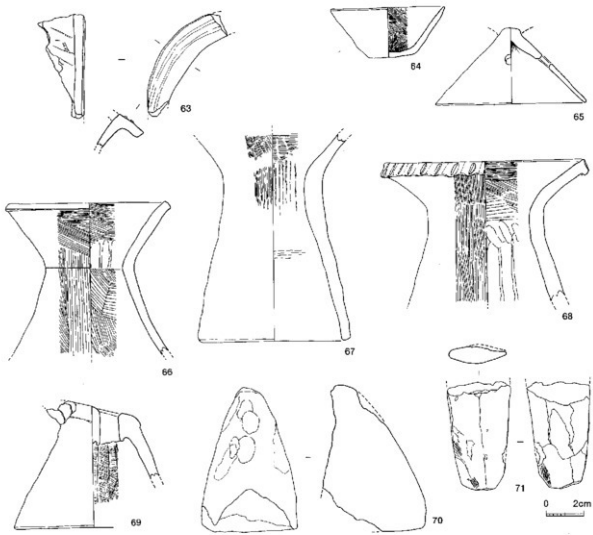


Fig.50 ＳＤ－０３中層ａ遺物実測図Ⅱ (1/3、1/2)

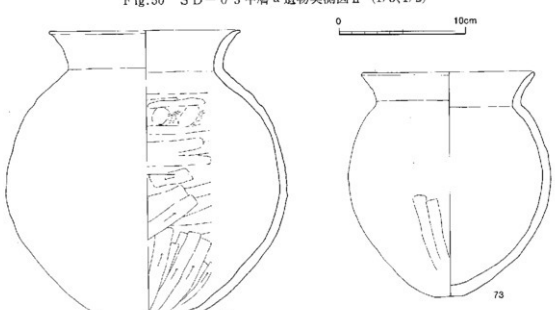


Fig.51 ＳＤ－０３中層ｂ遺物実測図Ⅰ (1/3)

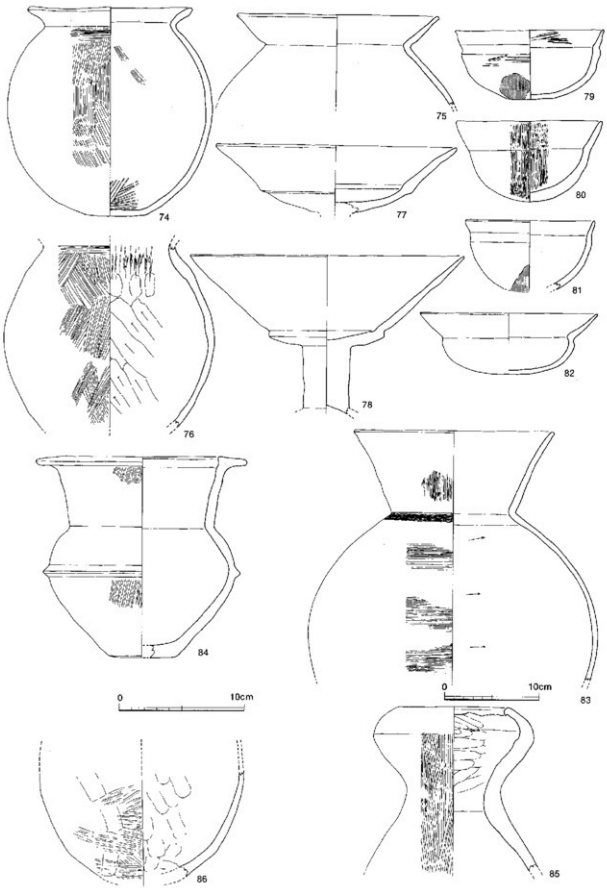


Fig.52　ＳＤ－０３中層ｂ、下層遺物実測図（1/3、1/4）

54は須恵器の坏身である。口径13.8cm、器高4.4cmを測り、カエリ部は緩やかに外湾する。

遺物の時期から6世紀中頃に位置づけられる。

中層a遺物（Fig.49,50、PL.12）

55は須恵器の坏蓋である。56は複合口縁壺である。口径15.4cmを測る。57は壺である。口径29.0cmを測る。58は甕の口縁である。口径15.8cmを測る。59は壺の口縁である。口径13.2cmを測る。60～62は甕である。60は口径13.2cmを測る。61は口径13.8cmを測る。62は口径16.4cmを測る。胴部外面に細かいタタキ目、内面にはハケ目が施されている。63は手焙形土器の天井部破片である。磨滅が著しい。福岡市内では西新町遺跡、警弥郷B遺跡についで3例目となる。他の2例と比べると胎土が粗で、色調が赤茶褐色を呈し、区別される。64は鉢である。口径9.0cm、底径3.5cm、器高3.9cmを測る。65は高坏の脚部である。66～68は器台である。66は口径12.2cmを測る。67は底径12.0cmを測る。68は口径15.8cmを測る。69は支脚である。外面は磨滅しており、内面はハケ目調整が施されている。70は中実の支脚である。手づくねでつくられており、湾曲する内側器面は黒色化している。71は石剣と思われる。片側中央部に明瞭な稜をもつ。

遺物は古墳時代初頭の遺物が主体をなすが、弥生時代遺物、上面からの新しい遺物も含む。

中層b遺物（Fig.51、52、PL.12）

72～75は甕である。72は口径16.2cm、底径5.4cm、器高23.6cmを測る。73は口径13.6cm、器高17.8cmを測る。74は口径12.8cm、器高16.5cmを測る。75は口径16.0cmを測る。76は甕の胴部である。最大径は胴部のほぼ中央にある。77は高坏の坏部である。口径19.0cmを測る。78は高坏である。坏部は下方に明瞭な段をもち、口径21.8cmを測る。脚部は下部が欠損しているが、上部は中実である。79～82は鉢である。79は口径11.8cm、器高5.5cmを測る。80は器高11.6cm、器高6.4cmを測る。81は口径10.2cmを測る。82は口径14.1cm、器高4.8cmを測る。83は壺である。口径10.8cmを測り、頸部外面に波状文を施す。84は弥生時代中期の壺である。口径16.6cm、底径5.4cm、器高15.8cmを測る。85は弥生時代中期の器台である。口径7.8cmを測る。

遺物の時期は古墳時代初頭に位置づけられる。

下層遺物（Fig.52、PL.12）

86は小型の甕か鉢の胴部下半である。外面はタタキ後ナデ調整し、内面はナデを施している。遺物の時期は弥生時代終末に位置づけられる。

中層の下部に黄褐色の地山ブロックがみられることと、下層の堀かたとの境に段があることなどから古墳時代初頭に溝を掘り返し、拡幅された可能性が高い。その場合、溝の掘削時の斜面傾斜角度より「V」字状に近くなると考えられる。遺構の掘削時期は出土遺物から弥生時代終末に位置づけられる。

5.小　結

今回の調査面積は700㎡強の調査ではあったが、現況が畑地であったこともあり各時代の遺構の遺存状態が良好で多くの成果を得ることができた。以下に調査成果をまとめる。

検出遺構で最も時期的に遡るのは弥生時代中期の甕棺墓である。調査地点は那珂遺跡群内に位置するが比恵遺跡群とも密接な関係にあり、両遺跡群において該期の集落が多く調査されている。この甕棺墓の被葬者もこの集落の構成員であろう。

ＳＤ－０３は弥生時代終末期に掘削された断面Ｖ字形の溝である。出土土器は古墳時代初頭のものが主体をなし、同時期の住居群が増え集落の様相が顕著となる。南西約800ｍに位置する第８次調査ではほぼ同方向の弥生時代後期の溝が検出されており、集落の東側への拡大が考えられる。ただしＳＣ－０１は溝の外側と考えられる東に位置することから溝に規制されることなく拡大したと思われる。

６世紀後半期において再び遺構が増える。ＳＤ－０３は掘りかえされ溝の機能をとりもどし、調査区南西部にも同時期の溝が掘られる。遺構として同一のものであるかどうかは不明であるが、断面が逆台形を呈するものである。注意される点は弥生時代終末期に掘られたＳＤ－０３が６世紀に至っても窪みとして残っていたと考えられ、今回検出の中層から上面までの埋没は時間的に緩やかであったと考えられる。

ＳＤ－０１、０２、１０は13世紀初頭の木棺墓２基と同時期と考えられ、溝と墓の関係から中世の屋敷墓と考えられるが建物の様相は今回の調査では明らかにすることができなかった。15世紀以降では深いＶ字溝が２条平行するように掘削され屋敷の敷地を巡っていたと思われる。

調査地点が比恵・那珂遺跡群が所在する台地の東側にあたるため各時期の集落の東側への拡大、縮小において重要な資料を得ることができた。

6.那珂遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

1．試料

試料は、那珂49　SC-02炭化材①、②、③の３点である。

2．方法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本を解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結果（表1）

３点の炭化材から３の樹種が同定された。ただし、試料①については詳細な同定は困難であった。なお炭化材においては、炭化の際に収縮膨張していたり、黒色の炭化物となることから表面構造の一部しか観察ができない。さらに、横断・放射・接線の各断面についての良好な破断面の作成が非常にむずかしい。したがって、同定の精度は生材に比べ遥かに劣ることは否めないため、このことに留意する必要がある。結果を表１に示し、ＰＬ.13に各断面の顕微鏡写真を示したが、試料①と試料③は状態が悪く写真が撮れなかった。以下に、同定された樹種の同定の根拠を記す。

表1　樹種同定結果

試　料	樹　種	（和名／学名）
炭化材①	散孔材	diffuse-porous wood
炭化材②	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
炭化材③	ブナ科	Fagaceae

a. ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky　ブナ科　　ＰＬ.13

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織からなる。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性低く、現在では建築・家具・器具・船舶・薪炭などに用いられる。

b. ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが中型から大型の道管が確認できる。

放射断面：放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科に同定される。なお本試料は小片であり、保存状態が悪いため、ブナ科以下のレベルの同定は困難であった。

c. 散孔材　diffuse-porous wood

横断面：部分的ではあるが年輪界をはさんで小型の道管が散在する。

放射断面：放射組織は異性である。

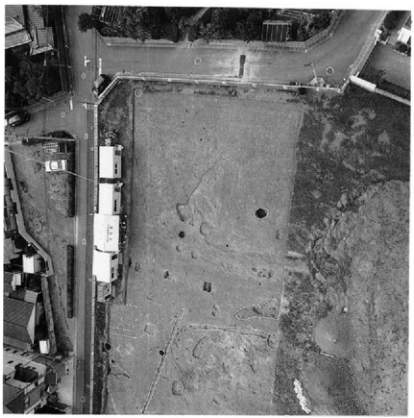
接線断面：放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は小片であり、保存状態が悪く、散孔材以下の同定は困難であった。

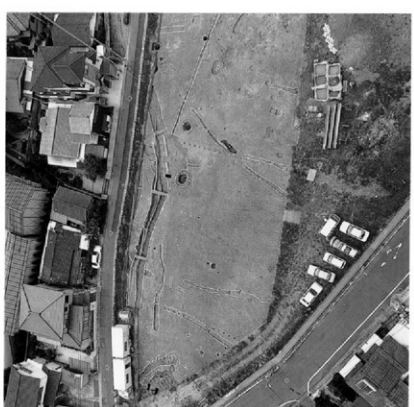
参考文献

島地謙ほか（1985）木材の構造．文永堂出版，p.20-100.

図　版

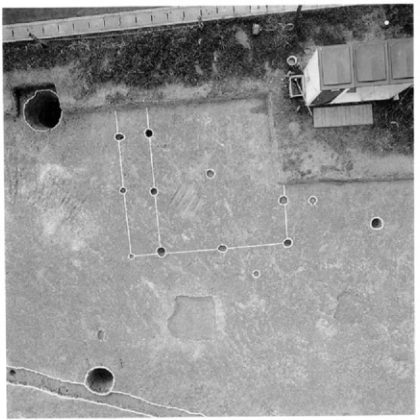


1．第４８次調査地点調査区北半部（上空から）

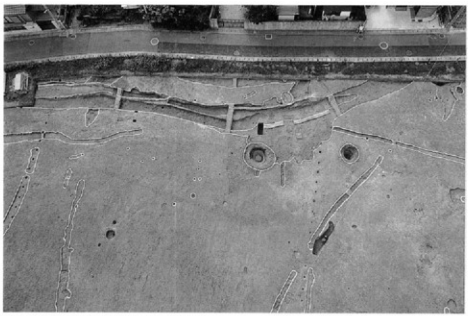


2．第４８次調査地点調査区南半部（上空から）

1．第４８次調査地点調査区南半部（北から）



2．ＳＢ－２０（上空から）



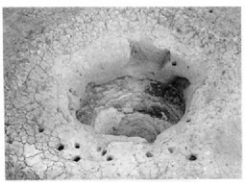
1．SD－01～05（上空から）

2．SD－01・02・05
土層断面①（南から）

3．SD－01・02・05
土層断面②（南から）

4．SD－01・02・05
土層断面③（南から）

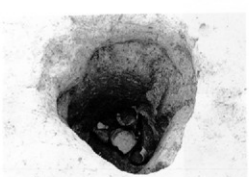
1．ＳＥ－０７（北西から）



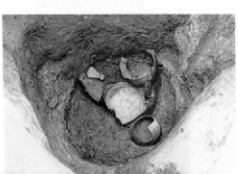
2．ＳＥ－０８（北から）

3．ＳＥ－１６（北東から）

4．ＳＥ－１７（東から）



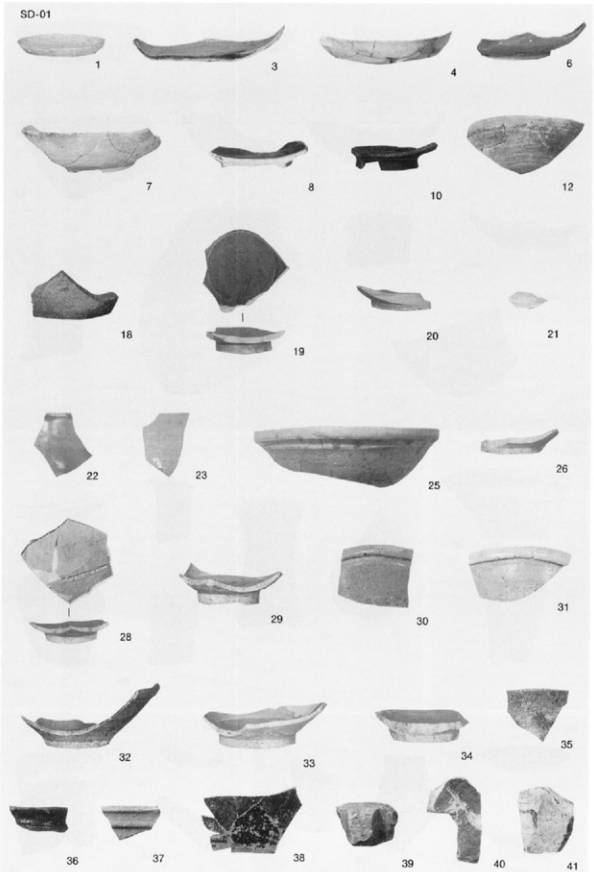
5．ＳＥ－３０遺物出土状況（北東から）



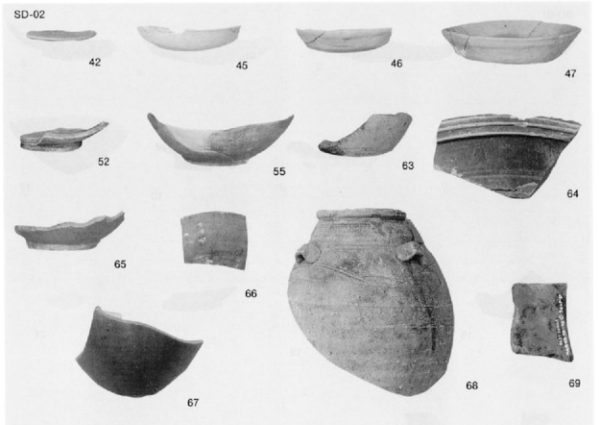
6．ＳＥ－３０遺物出土状況近景（北東から）

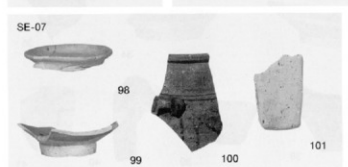
7．ＳＥ－３０完掘状況（北東から）

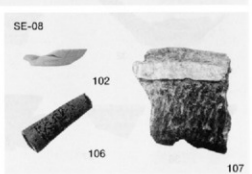
8．ＳＥ－３４（東から）



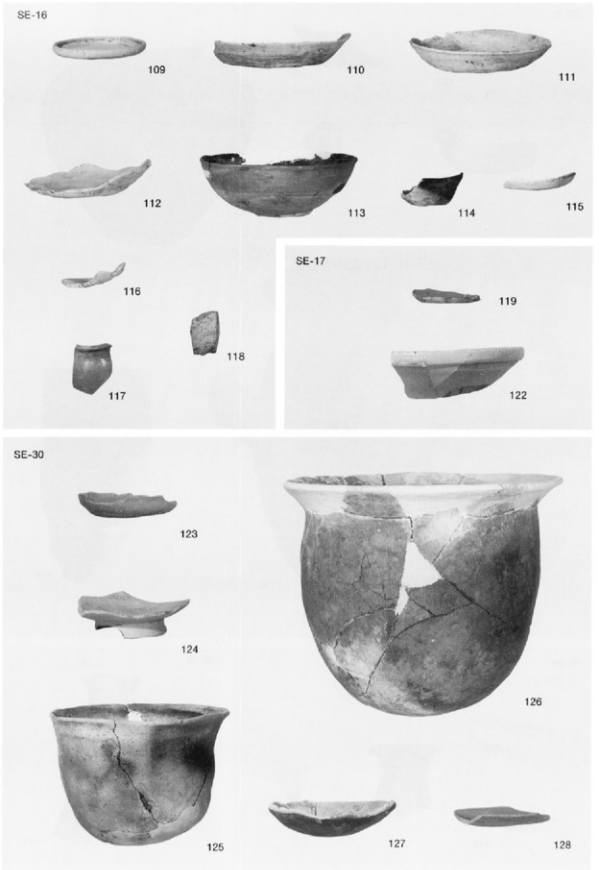
第48次調査出土遺物・I



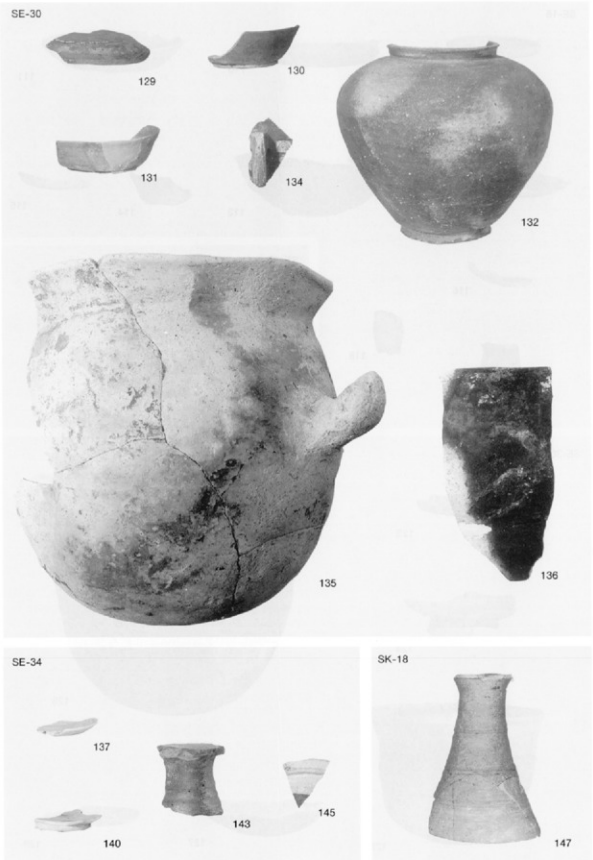




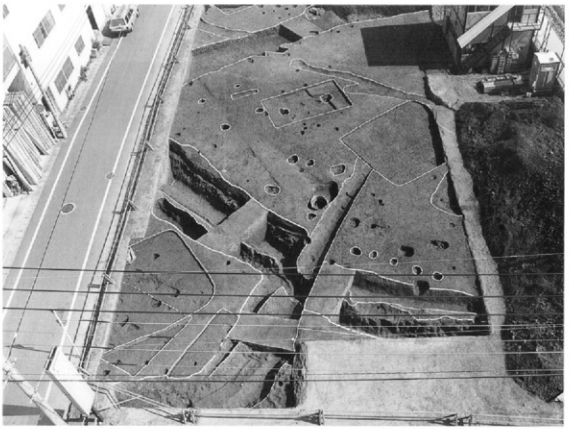
第48次調査出土遺物・Ⅱ



第48次調査出土遺物・Ⅲ



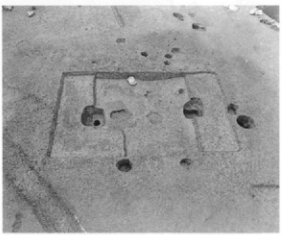
第48次調査出土遺物・Ⅳ



1．４９次北側調査区全景（南西から）

2．４９次南側調査区全景（北東から）

1．SC－01（北西から）



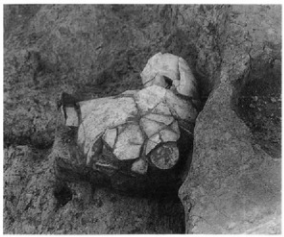
2．SC－02（北東から）

3．SC－03（東から）

4．SC－04・05（南東から）

5．SC－07（南から）

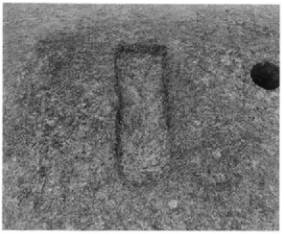
6．SC－08（北西から）



1．ＳＫ－０１（北東から）

2．ＳＫ－０２（北から）

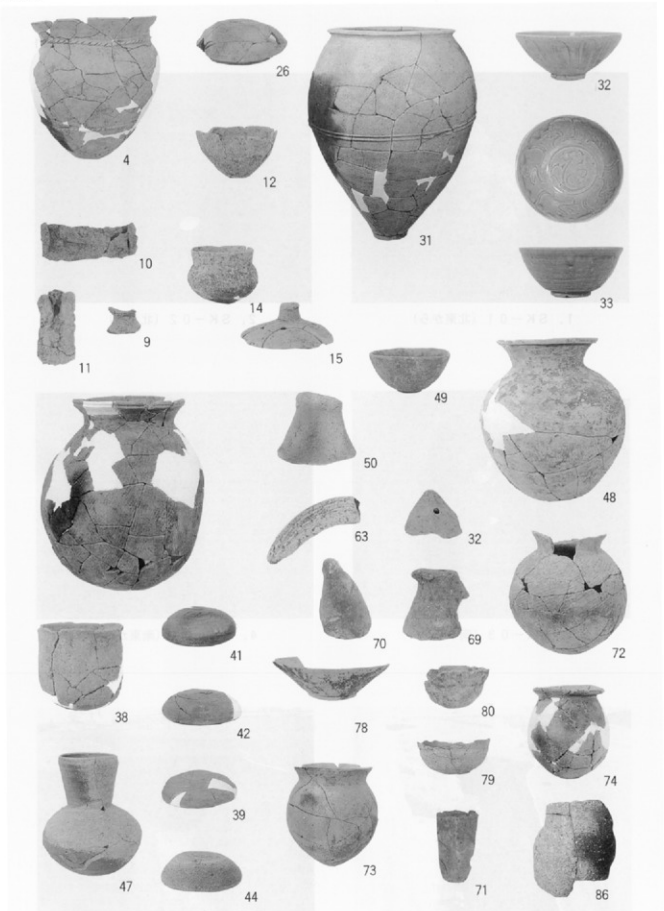
3．ＳＫ－０３（南から）



4．ＳＫ－０４（南東から）

5．ＳＤ－０３遺物出土状況（南東から）

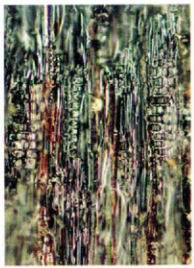
6．ＳＤ－０３土層断面（北西から）



出土遺物　4～26（竪穴住居）　31～33（土壙）
37～47（ＳＤ－１３）　48～86（ＳＤ－０３）

1．炭化物②　ツブラジイ　　那珂遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

横断面――――：0.4㎜



放射断面――――：0.2㎜

接線断面――――：0.2㎜

1．ＳＣ－０２出土炭化材顕微鏡写真

2．ＳＣ－０２炭化材出土状況（北東から）

那珂 16

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第455集

1996（平成8年）3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

☎(092)711-4667

印刷　慶和印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1丁目15-1

☎(092)474-4881